

サウジアラビア便り

Arabian Days and Nights

第二部

夏目椰子



目次

サウジアラビア便り 第一部 目次

まえがきにかえて

目次

- 1 熱〜い暑いサウジ生活のはじまり
- 2 気温五〇度、湿度一〇〇パーセント
- 3 コンパウンドというところ
- 4 イカマというもの
- 5 アバヤとムタワ
- 6 サッカー「日本・サウジ戦」
- 7 アラムコという企業
- 8 ちょっとドバイまで
- 9 アルコバールからラービグへ
- 10 ラマダン中のデカダンス
- 11 私の住んでいるところ
- 12 はじめての日本人女性
- 13 国際都市ジッダ
- 14 デザートキャンプ
- 15 ハラールとハラーム
- 16 タブーの魅力
- 17 ちょっと前までベドウィンだった

サウジアラビア便り 第二部 目次

目次

- 18 アラビアを見くだすトルコ
- 19 ハッジとウムラ
- 20 あふれるメイド・イン・チャイナ
- 21 歯科治療体験
- 22 真夜中のパーティ
- 23 ペスト・コントロール
- 24 女性の生き方
- 25 なぜクリスマスツリーを飾るのか
- 26 出稼ぎ外国人労働者（1）
- 27 出稼ぎ外国人労働者（2）
- 28 女性たちの明るい悩み
- 29 地図にない国、イスラエル
- 30 ラクダ

31 消えた旅行計画

32 さらばジッダ

33 アザーンを聞きながら

あとがき

九月トルコに行ってきた。ジッダ空港からイスタンブール空港までほぼ四時間、本来の時差は一時間だが、一〇月末までトルコはサマータイム実施中につきトルコとサウジは時差なしだった。

イスタンブールから始まった旅は、エーゲ海に沿って南下し、やがて地中海に面した町を最後に進路を北に変え、再びイスタンブールへ戻るという行程だった。

初めてイスタンブールに着いた翌日、冷たい雨が降り、人びとは長袖のジャケットやウィンドブレーカーを着込んでいたが、私には待望の雨と冷気だった。そしてその雨は日照り続きで節水を強いられていたイスタンブール市民にとっても尊い恵みの雨だったという。

遺跡めぐりの最初はあの有名なトロイ。トロイは、ある時代のひとつの都市国家の遺跡ではなく、九つの時代の都市国家の興亡が幾層も重なりあった遺跡として残ったところである。古い城壁に新しい城壁をつなげた部分もあり、トロイという都市＝町は、迷路のような作りだったのだ。このトロイの最も古い都市はなんと紀元前三千年ごろに造られたという。日本ではまだ縄文人たちが活躍していたころだ。気が遠くなるような遠い昔、エーゲ海の周辺には、高度な文明を持つ人びとが暮らしていたのだ。有名なトロイ戦争（紀元前一二〇〇年ごろ）で滅んだトロイは、おそらく第七市（下から七層目）だろうと言われている。

イスタンブールを出てからは、ほとんど毎日が古代遺跡をめぐる旅だった。遺跡めぐりの旅は、エーゲ海のリゾート地めぐりとも重なり、どこも観光客でにぎわっていた。そしてそれはまたトルコ料理を堪能する旅にもなった。

「トルコ料理は、アラブ料理に似ていますね」

日本語が上手なトルコ人のガイドさんにそうたずねると、彼は私の発言には賛成しかねる様子だった。

「昔、オスマン帝国がアラビアも統治していたから、彼らがトルコ料理から影響されたんですよ」



なるほど、順番をまちがえてはいけないということだ。日本人からすれば、双方とも使ってる材料にしても作り方にしてもほとんど同じようなものだ。それにどちらも極端にうす味である。なのにトルコ料理のほうがおいしい。香辛料をあまり効かせないトルコ料理のほうが風味よく感ぜられた。とにかく日本人はふだんホントに塩分をよく摂っているなあをつくづく思った。

トルコの店先には、美しくみずみずしい野菜がたくさん並んでいた。いつもサウジで半分死にかけて野菜ばかり見ているので街かどで見た鮮やかな野菜の彩りは忘れられないトルコの思い出のひとつとなった。



文明の十字路と言われるトルコ。東西文化という横糸と歴史という縦糸に紡ぎ出されて洗練されたトルコ料理が生まれたのだろう。そしておいしい料理といえば、なんといってもおいしいお酒！ トルコではお酒もたくさん楽しんだ。最近ではトルコ産ワインの銘柄も増えてきたそうで、値段は一本千二百～千五百円といったところ（味から言うと一本五百円～七百円くらい、というのが私の感想）。

九九%の国民がイスラム教徒のトルコだが、二〇世紀初頭の革命以来、いち早く西洋化による近代化をおし進めてきたので、現在、最も自由なイスラム国と言えるようだ。私の出会ったトルコ人はみなそのことを誇りに思っているようだった。

トルコにあってサウジにないもの

散歩する犬、運転する女性、酒、雨、そして政教分離。

サウジにあってトルコにないもの

王家、砂漠、アメ車、顔を隠して歩く女性、そして石油。

トルコでも石油が少しは採れるそうだがとてもわずか。なのでガソリンは二三〇円～二九〇円／リットルもする。日本の倍である。一方、サウジでは一リットル約一五円だ。そのせいだろうか、サウジではアメリカ車がたくさん走っているが、トルコでは燃費の悪いアメリカ車はほとんど見なかった。トルコの主流はヨーロッパ車。

車窓から街並みを眺めていると屋根の上にソーラーパネルを設置している家がとても多かった。おそらく国を挙げてのエネルギー対策なのだろう。

トルコ女性の服装については、都会と地方とでは大きな落差があることを感じた。イスタンブールの女性たちは他のヨーロッパの都市で見る女性たちと変わらない。ところが地方に行けば、いまだコートのように長い上着にズボンかロングスカートそして頭にはスカーフというスタイルの女性ばかりだった。

イスタンブールの街なかではひとりぶらぶら散歩している犬に出会った。路面電車の停留所前でだれかを待っているのかおとなしくすわっている犬がいた。リードでつないで犬の散歩をしている人も少なくなかった。イスラム教では犬が不浄の動物とされている。アルコバルに住み始めたころ、猫はたくさんいるのに犬を見ることがなく、不思議に思ったものだ（第一部「熱〜い暑いサウジ生活のはじまり」のページ参照）。ところがイスタンブールでは人びとはふつうに犬を飼っており、犬とともに暮らしている。人間は生きていくためにはいかようにでも変われるということを思わざるを得ない。



どちらにもあるもの

モスク、断食月、遊牧民、そして人口増加。

トルコでは私のような異教徒でもモスクに入れてもらえたが、サウジでは異教徒はモスクに入れてもらえない。またトルコもサウジもともに人口増加が大きな問題となっている。それぞれの国の人口構成比を表すグラフを見ると両国ともまるでモスクの屋根のような裾広がりの形をしている。少子高齢化に悩む日本の人口構成比グラフはさしずめ算盤の玉といったところなのだ。

どちらにもないもの

豚肉！

トルコではぜひともカツ丼を食べようと思っていたのに、とうとう豚肉にはお目にかかれなかった。聞くところによるとユダヤ教徒も豚肉は食べないそうだ。これはイスラムの教えというよりも中東周辺の人びとが豚肉忌避の遺伝子を持っているとしか思えない状況だ。

「トルコ語には、アラビア語と同じ単語があるんですね」
と、件のトルコ人ガイドさんに質問したとき、彼は「トルコ語とアラビア語はまったく違います。もし同じ言葉があるとしたら、それはオスマントルコ（のアラビア支配）のときに混ざったんでしょう」とのこと。ここでもまたガイドさんは露骨にアラブを見くだした言い方をした。

イスタンブールにアヤソフィアという有名なモスクがあって現在は博物館となっているが、もともとはキリスト教の大聖堂だった。あまりにもりっぱな建物なのでそれぞれの時の為政者たちが破壊できなかったのだ。キリスト教芸術とイスラム教芸術が混在するみごとな建物で、堂内にはイスラム教徒が唱える祈りの言葉がアラビア語で掲載されている。イスラムのモスクはたいていどこかにアラビア語が掲げられているものだ。イスラム教徒にとってアラビア語というのは特別な言語であるはず。なのにガイドさんはアラビア（サウジアラビアなのか）に対して強い対抗心があるようだ。西欧化が進んだトルコにはいろんなタイプのイスラム教徒がいるんだということはわかった。日本に留学経験があり、すばらしい日本語を話す彼は、大学教員をしている美しい奥さんを私たち夫婦に紹介してくれたり、青い地中海を望む瀟洒な自宅へも案内してくれた。彼は、自分自身を自由なイスラム教徒であると言いたかったのだろう。父や母から受け継いだイスラムを捨てることはしないが、心はヨーロッパ人であることを主張したかったに違いない。

トルコ人は七〇以上もの民族の混血からできたという。私には顔を見ただけではトルコ人もアラブ人も見分けることができない。中東の人びとというのはときにインド人のように色黒であり、ときにヨーロッパ人のように色白であり、濃く深い顔立ちであり、背が高い人も低い人も同じぐらいいる。殺しあい、支配しあい、信じあい、憎しみあい、そして影響しあって生きてきた人びとなのだ。大きく発展した民族もあれば歴史の中で消えてしまった民族もたくさんあるはずだ。ユーラシア大陸の東のはずれの島国の人間にはそれぞれの差異を簡単に認識することはできない。

2007.10.8

【引用コラム】

「『不浄なもの』／さて、イスラームでは、このようにアッラーによって禁じられたものを「ナジス（不浄）」、つまり汚れたものであるとしています。／ナジスには、実際に汚れているものと、意味的に汚れているものがあります。例えば、犬は実際に汚れたものとされます。そのために、犬の唾液が体についたならば、七回洗えと指示されています。／これも、犬が大変危険な病気を持っているからだと思われます。特に、狂犬病は唾液によって感染するためだからでしょう。預言者ムハンマドは七世紀の人物ですが、その頃からそういうことが分かっていたと思われます。／一方、酒等は意味的なナジスです。酒が体についたからといって害にはなりません。酒は飲んだ結果害をもたらすとしてナジスとされたのです。同様に、豚の唾液は汚れたものとはされていません。／また、『クルアーン』やハディースが成立した当時にはなかったものでも、学者達によって汚れているとされたものもあります。例えば、麻薬は七世紀の頃、イスラームの世界にはなかったものですが、やはり、これも大変に害のあるものだとし、禁じられました。／さて、ナジスとされたものを行なってしまうたり、食べてしまった場合に、どうすべきかということも決められています。-以下略-」（「イスラーム研究その1 食事の禁忌と不浄」『アラブイスラーム学院ホームページ』）

昨年一二月、ホームリープ（帰国休暇）で帰国したときのこと。ジッダ空港（正式にはキング・アブドゥルアジズ空港という）を発つのがちょうどハッジが始まる一七日（ヒジュラ歴一二月八日）だった。

その日、知り合いのサウジ人が自分のベンツで私たち夫婦を空港まで送ってくれたのだが、私がクルマの後部座席に乗り込もうとしたときそこにはすでに先客がひとりちょこんと座っていた。真新しい白い布で顔のまわりをきっちり包んでいるのもともと丸くて色黒の顔がますますまん丸く見える若い女性だった。彼女はイスラム教徒のインドネシア人でサウジ人の家のメイドとして働いている。初めてハッジに行く彼女を雇用主であるサウジ人がマッカ（メッカ）へあるいはハッジ行きのバス乗り場まで連れて行ってあげるところらしい。

よく知られているように一生に一回ハッジ（聖地巡礼）を行うことはイスラム教徒の義務である。だから世界中から働きに来ていたイスラム教徒の労働者たちにとって、マッカとマディーナ（メディナ）という二つの聖地をかかえるサウジは特別な場所である。それに雇用主もメイドもともに同じ神を信じる者同士の連帯感がある。イスラム教徒が行うべき五つの義務（ハッジはその一つ）はそのどれもがイスラム教徒同士の一体感を高めるためのものである。

ラービグからジッダまでの一五〇キロはクルマで一時間強。途中で信号はほとんどなく平均時速一三〇キロで走る。

あどけなさが残るインドネシア人の少女はじっと窓のほうを向いていた。彼女たちは主人や奥さんの友人知人とは紹介されない限りあいさつもせずに黙っている。またあいさつのときも満面の笑みを見せない。人と接することに慣れていないのかシニカルなのか、表情が乏しいように見える。じっと黙っているのもへんなのでこちらからあいさつを試みた。アラビア語はすこしずつ理解できるようになるらしいが、英語はほとんどわからないようだ。「私もあなたのようにヒジャーブ（黒い布）を頭にうまく巻きたいのだが巻き方を教えてほしい」と身振り手振りで話しかけたら、彼女は「そんな簡単よ」とでも言うように誇らしげに私の頭にヒジャーブを巻いて最後に緩まないようにきっちり留めてくれた。ありがとうと言うとはじめて笑顔を見せてくれて、ほっとした。

ハッジ渋滞を予測して早めに家を出てきていたが、道路はさほど混雑してはいなかった。ジッダ市内に入って少しだけスピードが落ちたぐらいだった。スピードが落ちてくると周りを走る同じ方向の車の様子が目に入って来た。顔の黒い労働者たちを乗せた大きな古いボンネットバスがエンジンを唸らせながら走っていたり、定員いっぱい男の人ばかりが詰まったワンボックスカーの屋根に布団が何枚も積まれて紐でしばってあったり、男女が乗り合わせている大型の観光バスもあり、二、三台連なって走っているバスもあった。家族連れと思われる乗用車もたくさん走っていた。隣国のヨルダンやイラク方面から車で国境を越えてやってくる人びとも多いらしい。アフリカから船でジッダ港に着く人びともいるのだ。おおぜいの人びとがマッカを目指して同じ方向へ走っていた。

車がジッダ空港に近づくと巨大なテント村のような建物が見えてくる。傘のような形の天蓋がいくつも整然と並んでいるからテント村のように見えるが、常設のりっぱな建造物である。現地の日本人の間ではそこは巡礼者の宿泊場所と言われているのだが、「ハッジ・ターミナル」という空港内の施設である。巡礼用ビザを持ってサウジに入国した人はこのハッジ・ターミナルに到着するのだ。巡礼に向かうバスの発着所でもあるのだろうか、バスを待つおおぜいの人びとのがたがえす様子が走る車の中からも見える。

ハッジ・ターミナル



空港に到着すると、想像していたほどではなかったがハッジの時期らしい喧騒が感じられた。なぜか私たちと同じように出立する人びとも多い。

チェックイン前の巡礼者たちの荷物といったらほとんど引越しのようである。鞆やダンボールや布団などが山と積まれている。ジッダ空港ではカートなどでは上品に過ぎる。リヤカーでも置いたほうがいくらいである。

団体で巡礼に参加している人たちを見ると高齢者が多い。アジア系の皺だらけの顔と小さな身体に粗末な持ち物と身なりで聖地巡礼を果たす人びとの群れ。高齢といってももしかしたら五〇代六〇代かもしれない。それぞれのグループは同じような民族衣装をまとった人びとで固まっている。

女性たちは黒いアバヤ姿ではなく自国の衣装をまとっている。インドやパキスタンなどの原色のパンジャビスーツ（パンジャビドレス）&サリー姿はわかりやすいがその他の国の民族衣装はよくわからない。大きな白地の布を被っているのはインドネシア、マレーシア辺りの女性たちだろうか。アフガニスタンの女性たちも同じような白いスカーフ姿のようだ。スカーフの下にはそれぞれの民族や地域の衣装を着込んでいて、多彩な民族衣装にしばし目を奪われてしまう。

フライトを待つ間『アラブ・ニュース』紙を手にとってみたら、今日から始まるハッジの記事が一面に掲載されていた。

記事によると、巡礼者は世界中の約一五〇カ国から一六〇万人以上。インドネシア、イラン、インド、パキスタン、エジプト、トルコからの巡礼者の数が多く、イラクからも約三万一千人がサウジ入りしており、アラブ人の総計は三五万人以上。サウジ国内からは約百万人（出稼ぎ外国人労働者を含む）が巡礼に参加する。また本年のアブドゥラー国王の巡礼招待客は一千人。イランのアハマド・ネジャド大統領もそのひとりだそうである。イランはシーア派。それもサウジのシーア派政策のひとつかもしれない。

搭乗ゲートのあるコンコースではいろいろな国の巡礼団とともに出発を待つ私であるが、ハッジの行事はまさに今日から始まるというのに私と同じように今日ジッダ空港を出立する人びとがおおぜいいるのはいったいなぜなんだろうと疑問が渦巻くのがあった。

じつは私はハッジ＝巡礼と考えていた。しかしハッジとは、ある決められた時期にマッカに行き、決められた儀礼をこなすことであるそうなの。イスラム歴（ヒジュラ歴）の一二月八日～一

二日前後の間のみハッジの儀礼は行われ、それ以外の日程で行く聖地巡礼はウムラというそう
だ。調べてみたら日本語ではハッジを大巡礼、ウムラを小巡礼と訳している。訳語があるぐら
いだから、知ってる人は知っているのだろう。しかしハッジとウムラのやり方の違いなどは複雑
である。とにかくイスラムの巡礼にはハッジとウムラという二通りがあるということはおわ
かりいただけたでしょうか。私たちといっしょにジッダを発った巡礼の人びとは厳密にはハ
ッジを行ったとは言えないことになる。

ハッジという短い期間に二百万人もの人びとが一カ所に集まる。体力がない人は安易に
参加できないだろう。毎年のように死者が出るとも聞く。ハッジ・ビザの発給も各国の人口
による割当て数が決められているそうだから、希望しても簡単に行けないらしい。また巡
礼旅行パックなどはハッジと真ん中の日程の費用が最も高い。遠国に住む人びとはハッジ
に行けなくともせめてウムラで巡礼を果たしたいと考えるのだろう。ジッダ空港に一年中
巡礼の人びとがいるのはそうした理由からなのだ。

何回もマッカ参りをしているというラービグ・コミュニティ在住の男性がいる。以前から
疑問に思っていたので、「なぜそんなに何回もハッジに行くのか」とたずねたら笑いながら

「何度でも行く。マッカは素晴らしいところだ」

と的外れな答えが返ってきた。彼がスマートな返事を返してくれない理由はわかっている。
それは私が異教徒だからだ。私が何をどのように知りたいのか彼にはわからないのだ。私
の「知らないさ」のレベルを知らないから、笑って簡単に答えることを選んだのだと思う。

ラービグ在住者にとってマッカまでは車を飛ばせばせいぜい二、三時間、もうひとつの
聖地マディーナまでも同じぐらいの道程である。マッカやマディーナ住人および周辺に暮
らす人びとはハッジもウムラも容易く果たせる。地球の反対側からやってくる巡礼の人
びとと比べたら不公平この上ない気がするが、異教徒である私たちは、いずれにせよ、
この二つの聖地には入ることができないし、イスラム教徒たちのめざす来世から最も遠
いところにいる。

とにかく「なぜそんなに何回もハッジに行くのか」とたずねた質問自体が誤りだったのだ。
「なぜ何回も巡礼に行くのか」このように質問すれば私の希望に近い答えをもらえたか
もしれない

。

2008.1.12

ここラービグは最近とても涼しい。日中はやはり暑い、朝夕はひんやりとしていて快適。去年の冬はこんなに涼しくなかった。暑い夏の後には寒い冬がくるみたいな公式がここでもあてはまるのか…。

いま日本では毒入り餃子がずいぶんと騒がれていますね。日を追うごとに新たな毒入り品目が登場してくるので、これは中国の陰謀ではないかなんていう話もあるみたいです。いずれにしてもなにか動かしがたい中国の「意志」を感じてしまうのは私だけなののでしょうか。中国産野菜の残留農薬、おもちゃからの鉛検出などが問題になったことも忘れはしませんが、それほどまでに中国製品が問題になる理由は、世界中が中国製品を買うからに他ならないというのっぴきならない状況ですね。

じつは、私の冷凍庫にも日本製冷凍食品がいくつかあるので、早速調べてみたところ、牛タン：中国製、枝豆：中国製、シュウマイ：日本製という表記であったが、このシュウマイが本当に日本製かどうか疑わしいところだ。この他にも水を入れて作るウーロン茶と麦茶も中国製、日本のメーカーの食料品もよくよく調べてみればほとんどが中国で製造されたものなのである。もうバカらしいから調べるのは止めた。だって中国製とわかっていても食べないわけにはいかないこの状況だし。でも怖ろしいのは食べ物にかぎらない。

私はサウジで中国製品に囲まれて生活している。これがじつに精神衛生上よくない。中国製品にもピンからキリがあるらしく、サウジではキリの中国製品が溢れているのだ。

自転車。見た目はカッコよさそうなマウンテンバイク、一台六千円ほど。安いからそれを買ったのではなく、自転車というと中国製のマウンテンバイクしか売ってなかったからだ。同型のMBを買った日本人がたくさんいて、うわさでは「すぐ壊れる」という代物。私のMBも乗ってすぐにブレーキのワイヤーが切れた。ペダルは最初からすこし曲がってついている。チェーンが剥き出しでズボンの裾がいつもオイルで真っ黒くなる（これはMBの宿命なのかな）。

そして昨日、致命的にそれは壊れてしまった。前輪の中心がぐらついて、走ると左右に振れ出した。もう笑うしかない。

家の設備はサウジ人好みのヨーロッパ調なので、照明はほとんどが二酸化炭素をたくさん排出する電球。その電球が頻繁に切れるので、長持ちする蛍光電球を買おうと思って出かけたのだが、売っているのは中国製だけ。陶器でできている接続部分を見たら、ぐらついていたので買わずに帰った。チェコ製の電球も見つけたけれどやはり買う気になれない代物だった。

家の備品のフロアスタンドや卓上型電気スタンドも中国製。一見高級そうな黒い鋳物風スタンドを布で拭いたら、表面が剥がれて白いプラスチック素材が現れた。友人宅で、モダンなフロアスタンドを移動しようとしたら、まっすぐ立たなくなってしまった。友人曰く「心配しないで平気よ。もともとそうだったから、はっはっは」

コンセントと差込口をつなぐ延長コード。これもなぜか中国製しか手に入らず、しかたなく使ったら、これが知らぬ間に火災を起こす危険きわまりない代物だった。私も一度ミスをしてしまったのだ。延長コードのタップに掃除機のコンセントをつないで掃除し、二回目に異臭に気づ

いた。見てみたら延長コードを覆っているビニールが溶けてくっつきあって、ぱちぱちと火花が出ているではないか。私の場合、大事に至らずにすんだが、他家では留守中のボヤ事件も発生している。

キッチン用品も中国製品が多い。ステンレス製品はほとんどが中国製だ。ゾーリングンによく似た名まえの包丁や使う前から取っ手がゆるんでいる鍋など、数え上げたらキリがない。

モノを買うときには中国製品を買わない選択肢もある。日本製、アメリカ製、ヨーロッパ製などの商品を買えばいいのだが、これもあとでよくよく見てみると中国で製造されたものだったりするから、万事休すである。

日本でもいまやどこへ行っても中国製品のオンパレードだ。中国製品にだいぶ慣れてきたつもりだったのに、サウジの中国製品の粗悪ぶりには驚くほかない。日本ではここまでヒドイ中国製品にお目にかかることはなかったのだ。とにかく made in china にもいろいろなランクがあるということだ。

また有名ブランドをもじったようなロゴや名まえを付けて売られているものも多数ある。SONYやPANASONICをもじった製品なども出回っているらしい。ジッダはヨーロッパの高級ブランド品が破格で手に入る都市として知られている。通り過ぎる女性たちが持っているブランドのバッグを見て「コピー、コピー」と笑って言う人がいるのだ。なぜそういうことが可能なのかという理由も、中国製品と大いに関わりがありそうだ。

アラビア人たちもこうした状況にはちゃんと気づいていて「made in china は買わない」と言う。しかしそうはいてもサウジはほとんどあらゆる工業製品を外国からの輸入に頼っている。石油以外には自国製品というものをほとんど持っていない。外国資本のサウジ法人とでもいべき企業が作り上げごく一部の製品があるぐらいのものだ。実際に中国製品がサウジの生活を支えていると言っても過言ではない。

「より安い商品」を世界中の人びとが求めているのも事実だが、そうして「より安い商品」がバラまかれて世界中の人びとは自分たちの伝統や文化をどんどん失っていつている。しかしここまで書いてきてふと日本のことを考えてみた。

戦前や戦後まもないころの日本もオリジナリティのない欧米の模倣品を作っていたのではないか。六〇年代「外国旅行で買ってきたみやげものがじつは made in Japan だった」というのはジョークとしてよく知られていたものだ。同じように中国人たちは今、金儲けのためにあらゆるもののイミテーションを作り続けている。イミテーションというのは創造性のないものだ。モノとしての形だけあればいいものだ。ギョウザだって同じことだと思う。見えない部分は手を抜いて形だけ作ればいいという製造現場の構造的な「意志」があったと思う。

去る一二月にサウジ国内で逮捕されたテロリストたちは中国製のミサイルを持ちこんでいたそうだ。すでに中国が作り上げてきた世界市場は抜き差しならないほど深く広い。中国がイミテーションを作らなくなったとき、一三億の中国の「意志」はほんとうの脅威になるのだろうと思う。

三月二七日

あなたにメールしようかなあとちょうど思ってたところよ。マミー歯科のHPも久々に見ました。ご主人とあなたのツーショットも。

ずっと歯の調子が悪くて、実は昨日ここのデンティストに行ってきたところなの。昨日は痛くて痛くて固形物を噛めなくなってしまったので。上の前歯から左に数えて四つ目。子どもところに虫歯治療してあったのに今回はじめて気づいたの。治療はこれからなんだけど、先生が説明してくれたのは、たぶんその歯の中にばい菌が入って、中に膿が溜まってるから、まず詰め物を取って、膿を出して（クリーニングして）、またそこを（白いもので）塞ぐよ。いまは、金属質のものがついてるけど。

とりあえず、痛み止めが効いて、きょうはすごく楽になった。今朝は、別の先生が結石（歯石とちがうのかな？）だけを取ってくれた。

病院の中に歯科があって、最初に顔のまわりを半回転するレントゲン撮影。それから、口の中に小さな器具をくわえさせられて、角度を変えて四、五枚撮影。診察前に血圧も測った。やがて四〇歳前後の男の先生が来て、いろいろ説明してくれた（三分の二ぐらい理解できたかな）。歯ぐきの中のポケットの深さも調べていた（この検査は、藤沢の「歯周病専門歯科医院」でもしたことがあったが、他の歯科ではしてもらったことはない）。となりにいる助手（看護師）に番号と数字を伝えて記録させるのね。

病院はアラムコ（まもなくペトロ・ラービグ社に変わるけど）の従業員の居住区域内にあって、治療費も薬代もすべて無料。はじめてこの病院に入ったとき、受付に女性が三人いてね、三人とも目だけ出てる覆面姿なので怖くて帰ろうかと思っちゃった。昼間は基本的に空いてるように見えるけど、次の予約の話のとき、先生はずっと先までアポが入ってるからちょっと待ってて、と言われた。やっと入れてもらったのは、三月三一日。

サウジ人たちの生活時間は夕方から始まるから、歯科の診療時間も午後一時から一時まで。ただし予約を入れれば、午前一時からもあり。

診察室も置いてある器具も清潔で、先生たちもみな気さくで楽しいし、日本で見たやり方と基本的に変わらないようだった。

歯科治療はたいていの場合、痛いからみんな嫌いでしょ？ 私もいつも行くまでは悩むけど、行き始めるとイヤじゃなくなるの。歯がさっぱりして、気持ちよくなるからね。

歯科医として何かきいてみたいことがある？ 私がインタビューしてくるわよ。

例えば、「サウジ人の女性が来たときは、どうするの？」など。

実は今朝、この質問をすでにした。先生「もちろん僕がするよ。彼女たちはベールをとって顔を出すよ」

とのこと。女性の歯科医師が今はいないから、しかたないのね。

もらってきた薬は、Tab Brufen 400mg（一日三回食後）、それが効かないときは、Amoxi 1500mg。とりあえず、今朝も昼もなんとか食べることができた。

三月二八日 日本の歯科医からの返信（一）

診療としては、うんうん、しっかりしてるじゃないの、というのが感想。

実は私は小児歯科専門なのであまりやらないけど、でも、やっぱり、ポケット診査とかは必要ならやっています。

日本は保険点数制で、出来高払いなので例えばあなたの受けた治療だと、半回転するレントゲンはオルソパントモグラフィと言って、日本だと自己負担は千円くらいかな？

口の中にくわえたって言うのは、レントゲンフィルムじゃないとするとデジタルレントゲンのイメージプレート（センサーみたいなもの）かな？ とすると、実に先進的だわさ。

ポケット診査は千二百円、歯石（stone ていうのは歯石のことよ）を取るのはいろいろあって、日本では初診時には算定できない。初診料が六百円ぐらいで、うちの主人がやると、計三千円以下ね。

これ、アメリカでやってもらうと二、三万は軽くかかる感じかな、保険なしだと。いいわねえ、無料なんて。

ポケット診査は歯周病の治療を保険でやるんなら義務なんだけど、ちゃんとやる人少ないのよね。（ホラ、やらなくてもわかんないじゃない）。そういう先生たちの言い分は「患者さんが嫌がるんだよ、歯茎をちくちくされる、と言ってね」

日本では歯科医師会が不正献金をしたとか、何か不祥事があると、報復改訂、といって保険点数を不当に下げたりされるのさ。私たち保険医は、厚生労働省から「こんな風に治療しなさい、そしてこういう風に点数を算定しなさい」といわれ、「そんなあ、学問的根拠のない治療じゃないか！」と思っても、文句を言う窓口ないのよね。

さてこの次、根の治療をするとき、私のHPにあるような「ラバーダム」やるかなあ？ やるね、きっと、真面目そうな歯医者さんだし、生活に余裕ありそうだし（ホント、衣食足って礼節を知る、よね）。

厚生労働省どおりにやっていたら、大金持ちでない限り、まず確実に歯科医院は倒産しますもの。

四月一日

昨日再度、歯科に行ってきた。診療一手術（？）の流れは以下のようなものだった。

私は二種類の予約カードを持っていた。

- (1) 三時半ー四時半 歯石取りの続き フィリピン人のドクター
- (2) 四時半ー六時 痛かった歯の膿を出す手術 レバノン人のドクター

受付に行くと、それぞれのドクターとあいさつしたんだけど、レバニーズドクターがまくし立てて、なにやら時間がないから自分が先にやるとか言ってる。

「それと、全部終わったら、ドクター・ハナのところに連れて行くよ」とレバニーズドクターが私に作り笑いをする。

遠くで、女性フィリピン人看護師が「先生、四時に出発よ」とか言ってる。三時三五分、「三

「分しかないじゃないの」と私、思う。

フィリピーノドクターはうなずいてるので、私はレバニーズに付いて、彼の診察室に入る。レバニーズは、すごい早口で、いろいろ言ってる。

「通常、二時間かかるけど、今日は一時間でやるよん？」

私、ぜんぜん納得できないけど、反論もできないで黙ってる。

レバニーズ、英語で書かれている文面（手術の申込書あるいは契約書？）を示して、説明してるけど、私、よくわからない。「手術ってほどじゃないけど、いちおう、ほらこれね」とか曖昧に言って彼が項目にチェックを入れている。「はい、ここにサインして」みたいなノリで、私、かなり投げやりな気分。

「ええ、まあ、いいですよ」と私、うなずいた。

麻酔はすぐ効き出した。

「さあ、これはリングです。これをつけるよ」

うなずくしかない。

「これは知ってるか？」と、薄～いブルーのゴム用シートを広げて、小さな穴を開けている。

「ノー」

「これは、△△をプロテクトするもの」

「え？ 何をプロテクトするんですか」

「△△。これがアラムコ・スタンダードだ！」

それは、ここのコミュニティで働く人が、相手を黙らすときによく使う水戸黄門の印籠のごときコトバである。

わかんないまま、すでに私の口の中に。

歯にリングをかけ、ゴムシートが口の中に広げられている。目を開けたいけど、開けると先生と目があってしまい気まずいので、しかたなく目を閉じる。詰め物が取られ、ドリルがグワーングワーンまわって、ヤスリでごしごし穴の周りを研いでいる（全工程、見えないからすべて感じるだけ）。

ここですでに四時。レントゲンを撮って来るよう言われ、例の口の中だけの撮影。手当てした部分を撮影したいらしい。その部分に二、三センチ角の四角い固いものを置いて「噛みしめろ」と言う。角が当たって痛いから私は「無理」と言う。フィリピン人看護師が防護チョッキを身に付ける。一回目失敗、二回目失敗、三回目強引にオーケーとなった。

その後、シリコンの挿入の後にまたそこをレントゲン撮影し、歯の表面の詰め物が終わるとまたレントゲン撮影、そしていよいよ終盤となった。でも先生は、最後の詰め物を入念に調整していて、なかなか終わらない。

「あと一〇分...、あと二分...、終わったら、ハナ先生のところに行くよ（ぐずる子どもをなだめる風）」

「あと四五秒、...」

そしてひどく長い四五秒が終わった。小さなフィルムを三枚か四枚見せてくれて病状と処理した内容を説明してくれた。

「さあメディケーションだ。もし痛くなったらこれを飲んで。さあ、薬をもらって、そしてハナ

先生のところに行こう」

ときはすでに六時になろうとしていた。

ドクター・ハナは、エジプト人女性。最初に歯科医（レバニーズドクター）と会ったとき、雑談の中で私がアラビア語を習いたいと言ったら、二度目に会ったとき彼（名まえはヨーセフ）は「先生がみつかったよ。ドクター・ハナだ。彼女は君を知ってるって言ってるよ」とやけに気合いが入ってる。そうなの、以前レバノン人のローナと彼女の子どもの薬をもらいにハナ先生の診察室を訪れたことがあったから。

ハナ先生の診察室に行くと話はずぐに決まり、「では、次の日曜日から始めましょう」ということになり、また歯科に戻った。

「先生、この詰め物はもちますか？」

「だいじょうぶ、一〇年したら取れるかもしれないけどね。もっと強固にしたいなら、金属がいちばんだよ。そして歯をぐるっとカバーしてね」

ヨーセフ先生はジョークの達人かつ作り笑いの名人。彼はいつも人を笑わせようとかまえてる。話すときには大きなジェスチャーと作り笑いを欠かさない。

〈いやだわ、笑ったときに金歯が見えたりするのは〉

とにかくしばらくはこれでもつだろう。

フィリピーノドクターを探しに行ったのに会えずじまい。結局、歯石取りのアポは無視されちゃったのだ。「四時半―六時」の時間設定はなんだったんだろう。ヨーセフ先生、まだそこにいる。また来いとも言われない、私、どうするんだろう。英語理解力不足の私のせいかな。

帰りぎわ、化粧を直そうとトイレに行き鏡をみると、手術中にずっとかけさせられていた「防護めがね」の跡が顔にくっきり残っているのではないか（鼻が低いから）。日本じゃそんなもの、したことなかったけど。

と、まあ、こんな具合だった。

いまのところ歯の調子はすこぶるいいですよ。痛くなったら、また行けばいいしね。ところで、日本じゃ先生は歯石取りしないよね。ドクターって呼ばれてたけど、フィリピーノ君、ホントにドクターなのかな。

四月一日 日本の歯科医からの返信（二）

歯石を取るのは、ドクターではなく hygienist。

日本では男性は（いるけど）珍しい「歯科衛生士」です。

それから、「リングをはめます」以下は私が気にしていたラバーダムです。わたしのHPにちゃんと説明してあります。何をプロテクトするのかそれ読んでみて。

日本では先月まで一〇〇円（患者さんの負担は三〇円）請求できましたが、それでも一枚三〇～四〇円するのに、手間がかかるのでなかなか普及してくれず、私たち小児歯科医やそういう主義の歯医者さんだけが、ラバーダムをかけて神経治療や詰め物をします。今月から〇円になりましたので、いよいよやらなくなるわ。歯科医療のレベルに関わる問題なのに。

それにしても、神経をとった後のスペースにすぐに根の充填材（シリコンと少し違う、ゴム材です）をつめて、最後の詰め物までしてしまうの、度胸あるなあ。私たちは根の消毒剤を入れて何日か様子を見て充填材を入れることが多いです。

最初ラバーダムをかけたまま（違うか？）レントゲンを撮ったのは歯の根の長さ確かめるため。それで確かめた長さに充填材を入れたあと、ちゃんと入っているか確認にまた一枚撮ったのね。

これは膿が溜まっていたのではなく、神経が腫れていたんだと思う。膿は神経が死んでしまっ腐って溜まるものなの。歯の根の先に膿が溜まっている上から神経の穴に充填材入れたりしたらソレこそ、腫れあがってしまいます。

私たちはそうね、白い詰め物をする人が多いですが、まあ、前から四番目の歯なら大丈夫かな？ たしかに金属かぶせた方が確実です。表面の、見える部分を白くすることが出来ます。ただし保険は利かない。うちなら三万くらいよ。

2008.4.1

22 真夜中のパーティ

東京では寒かった冬が行き、桜の花も行き、いよいよ美しい新緑の季節がやってくるのですね。あざやかな四季の変化がここに「無常観」を宿すとすれば、四季のない国では「永遠」という感覚がここに宿るのかもしれませんがね。とはいうものの、ここにも季節の変化というものがあり、私が庭で育てている野菜や花たちはちゃんと季節をわきまえて生きているのがなかなか感動的です。

ある夜、サウジ人女性だけのパーティに招かれて行ってきた。「インヴィテーション」には時間は夜八時一〇時となっていた。

「サウジ人の生活・習性 なんでもみてみたい」私にとってなんとも嬉しいお誘い。何を着て行こうかしら、何を手土産にしようかしら、と朝から忙しい。夜のお祈りが終わる八時半に来るようにとの別途お達しがあったので、八時半に行くことになった。

玄関のチャイムを鳴らすと、黒一色のヴィヴィッドなファッションに身を包んだジャミーラが現れた。胸と背中と脇が適度に露出し、裾がバルーンのワンピースにスパッツというスタイル。

そして客間。まるで「リカちゃんハウス」のようなロココ調家具と装飾品がずらりとならんでいる。あちこちの壁には不思議な立体アートがかけられている。窓に掛かるカーテンのフリンジも圧倒されるほどに豪華絢爛。そしてそこには、うすいピンクのドレスとあざやかな水色のドレスの女性が二人すでにソファにすわっていた。水色の女性は以前からの知り合いナスリーンだった。彼女は中学生を筆頭にした三人の子持ちだが、サウジ人にしてはめずらしくスリムで、焼けたような肌がとても美しく上品なたたずまいの女性だ。とにかく一人でも顔なじみがいたことで私は少し安心した。



さあ、これからどのようなシーンが展開していくのだろうか。サウジ人女性はほとんど英語をしゃべれない。ジャミーラは小学校の先生なので、私はいちおう彼女に集中的に話しかけるしかない。理解はしているようだが、彼女から返ってくる言葉は少しだけ。彼女もさほど英語が得意ではないようで、その強くて濃く美しい瞳でにっこり微笑んでくれるばかり…。

いったんアラビア語のおしゃべりが始まるとなかなか終わらない。彼女たちはホントによくしゃべる。本日の女主人であるジャミーラは女王さまのように周りをへいげいしながら早口でまくしたてている。そして私はみんなの顔を交互に眺めているだけ。

退屈しないかって？ そりゃ退屈ですよ。でも、ひととおりまくし立てると、女王さまは美しい笑顔と身のこなしでお菓子やお茶を給仕しに来てくれる。

お菓子。それがまたなんともゴージャス。
そして彼女の手作りのサウジ菓子はとてもおいしい。彼女のたてたアラビックコーヒーもとてもおいしく何杯もおかわりした。〈で、きょうはきっとこの四人だけなんだろうな〉と時計をみると一〇時半。そろそろ帰らなくちゃと思っていたとき、玄関のチャイムがピンポーン。



華やかに飾られたチョコレート

やって来たのは闇夜のカラスのごとき全身黒づくめ。これは女性だということを意味する。こんな時間に新しい客とは…。外側を覆っていた黒づくめを脱いで、ジーパンに長めのカシクールスタイルの青いブラウスを着た女性が客間に入って来た。

ふだん外で見かける女性は、頭から足まですべて黒づくめ。美人なのか不美人なのか、若いのか年寄りなのか、妊娠中なのかただ太っているだけなのか、判然としない。それが、女性だけの室内に入ると、それは堂々と露出的で派手な色彩の服を見せつけてくれるのだ。

アラビア人女性たちの化粧はアイメイクが基本。大きな目の周りを黒いアイラインでくっきり描いてより大きくし、長く黒いまつげをより黒くより長くしてシャープな顔立ちを作る。街なかで出会う全身黒づくめの女性たちからはそういう目だけが二つ覗いていて、妖しげなオーラを放っている。男性の場合見つめられたらゾクッとするかもしれないが、女性の場合凄まれた気がしてコワイ。彼女たちのメイク、日本人にはとても真似ができない。

黒づくめスタイルのときのもう一つの必須アイテムがアップに結い上げた髪だ。形よく作られた後頭部があることで凛とした全体像を形作ることができる。彼女たちはたいていロングヘアで黒髪（年配者にはショートヘアの人もある）。髪には天然の細かなウェーブが入っている。端的に言って縮れ毛である。日本人のような素直なストレートヘアの女性はいない。

この国の美容院に行ったことがある日本人に美容院の感想を聞いてみるとたいてい首を横に振

るのだが、アラブ人たちからは不満の声は聞こえてこない。なぜか。彼女たちはめったに髪を切る必要もないし、長い髪は結んだり、まとめてアップにしたりするだけだし、外出時には髪をヒジャーブ（黒いスカーフ）でくるんでしまうのだから、腕のいい美容師なんて要らないのだ。

またこの国では美容師はフィリピン人などの女性外国人労働者の仕事だからそれぞれの仕事場にも業界にも向上心というものが生まれてこない。世界中が何もかも同じでなくともいいけれど、日本の美容師さんは技術が高いなあと思つづく思うのだ。とにかくこの国ではまともな美容院というものが発達することは当分ないだろう。

さて、そろそろ眠くなってきた私は、帰りたいと申し出た。しかしジャミーラの瞳のパワーは強く「まだ、いいじゃない？」と言っている。

そしてまたピンポーン。三人の黒ずくめがやってきた。太ってはいないのに妙な貴祿を感じさせる、言ってみればおばさんたちだった。次のピンポーンでまた一人、気の弱そうなおデブちゃん。時間はかれこれ一二時を過ぎている。やがて最後の一人がやってきてダイニングに移動したのが一二時半。

真夜中のディナー。ウワー、すごい量の食事がこれでもかこれでもかとお出てくる。食事が出てくることを知らなかった私は、アラビックコーヒーとお菓子ですでに満腹。驚嘆の声をあげる人はいない。みな、お世辞のひとつも、「いただきます」も何も言わず、誇り高く食べ始めた。

ジャミーラは、みんなにサラダを取ってあげたり、カブサ（じゃないらしいが、名まえは失念）のようなロースト骨付羊肉&ピラフを皿に取ってくれたりして忙しい。まあ、私がいちばんの賓客（異国人&年長者だから）だったみたいで、いつも最初に配ってくれるのだった。

会話の内容はまるでわからなかったけれど、みんなが楽しく食事をしている光景はにぎやかで明るくて日本人の女性たちの食事会となんら変わることはない。



とても残念だったのは、食事がホントにおいしかったこと。あまりのおいしさに、満腹なのにほとんどの料理をガツガツと詰め込んでしまったわけで…。

宴たけなわの午前二時、ジャミーラは、一刻も早く家に帰って眠りたい私をやっと解放してくれた。

女性たちと顔を合わさないようにして彼女のご主人がそっと二階から降りてきて、私を車で家

まで送ってくれた。

2008.4.20

もうひとつ残念だったことがある。パーティにカメラを持って行かなかったことだ。なので、ここに掲載した写真三点は、ジャミーラの家とは無関係である。

コミュニティでは近ごろちょっとした「ねずみ騒動」が起こっている。家の中にねずみが出たことをはじめて聞いたのはアラブ人の女性からで、今から一年以上前だった。

「姿は見えていないけど天井裏をだれかが歩く音を一〇歳の娘が聞いた」というものだった。

話の主の女性はコミュニティの中にあるペスト・コントロール（PC）部門に電話をした。するとねずみ捕りの餌を天井裏に仕掛けに男の人がやって来たそうだ。私は彼女に「どう？ねずみは捕まったの」と毎日のように電話をして確かめた。じつは「ねずみ」という文字を書くことすら苦手のねずみ嫌いの私である（ああ、世の中は皮肉なもの。私は大の猫好き）。ねずみが捕獲されるまでその友人の家に遊びに行くことはできない。

「どう？」

「もう二週間も経つのに見つからないから、PCの男が毒団子を食べてどこかで死んでるだろうって」

「足音はどう？」

「しないみたいよ」

と彼女は明るい笑い声で答えた。最初はあるに怖がっていたのにきつと死ぬほどねずみが嫌いじゃないんだ。でも私は用心に越したことはない。私は一キロほど離れた彼女の家にはしばらく近づかないことに決めた。

年は改まって今年の一月ごろから、あちこちの家でねずみが出るという噂が伝わってきた。そしてなぜかねずみ出現場所がじわじわとわが家に近づいてきていた。一二〇～一三〇メートル離れたA子さんち、一〇〇メートル先のB子さんち。

「聞いてくださいよ。うちにねずみが出たんですよ。おそろしい」

「うちも出たんですよ。ペスト・コントロールに連絡したら、何やら板のようなものを持ってきてね、チーズとトマトをくれって言うの。インド人のおっちゃんがねずみはトマトが好きだって言うのよオ」

「オオ」

ちょっとしたどよめき。

ぎゃあー〉そばで聞いてた私は発狂しそうだった。

数日後、彼女たちから捕獲が成功したと聞いた。〈よかったよかった〉ところがあるお宅の庭でみんなが集まってお茶をしていたときのことだ。私は勝手口の横に置いてある「ねずみ捕り」（捕鼠器）を見てその女主人にねずみが出たのかをたずねた。彼女は朗らかに言った。

「そうなのよ。だからハテム（バングラデシュ人）に頼んで捕ってもらったの。私は殺してと頼んだんだけど、ハテムはね、殺すとまた別のが来るから海辺に捨てて来るって言って持って行ったのよ」

「なんで殺さないの」興奮した私は言った。

「だって、ハテムは殺しても殺しても来るっていうんだもん」

ぎゃあー〉私は卒倒しそうだった。

そしてとうとうわが家から二軒先のアヤコさんちでもねずみが出た。

「あのね、とつぜん何かが目の前を横切ったんですよ。部屋のだ真ん中で。で、あっという間にどこかに這入り込んだの」

「ど、どこかについて言ったって、ど、どこにそんな隙間があるの？」

わが家にも迫ってきたねずみ襲来、どんな些細な情報でも知っておかねばならない。しかし答えたのはアヤコさんでなく別の人。

「それがね、けっこういろいろなところが穴だらけなんですよ。こないだうちの食洗機がこわれちゃって取り替えてもらったんですよ。食洗機を取り外したとき後ろ側をのぞいたら空洞だったんです。だから私はそこにゴミ袋をガムテープで貼り付けて、それから新しい食洗機を入れてもらったんですよ」

コミュニティの中のどの家にもビルトインの大きな食器洗い乾燥機がキッチンのカウンター下に付いている。まわりで話を聞いていただれもが彼女の賢さに深くうなずき、家の中の「穴」探しへと話題は移った。

「居間と食堂のあいだの引き戸、あそこも中が空洞で、隙間があるわよ」

部屋を仕切る壁の中に戸袋があり、引き戸の上下に隙間があるのが見える。

「そうそう、部屋の真ん中でねずみが消えちゃったから床と引き戸のあいだの隙間が怪しいと私も思ってるんですよ」

「浴槽や洗面所の穴だってあぶない」

「でもさ、エアコンの穴がいちばん危険だよ」

セントラル方式のエアコンは屋根の上に取り付けられた機械からダクトを通じて各部屋に冷気が送られてくるシステムだ。部屋の天井が一段下がって、天井の中にダクトが通っている部屋もある。穴とはそうしたダクトの排気口と吸気口のこと、そこには金属製の格子網がきちんと嵌まっているのだ。

「格子網が付いてるじゃないの」

「アマ〜い。ここのねずみってホントすごく小さいのよ。だから通り抜けるんじゃないの、あのアミを」

私はもうほとんど生きた気がなくなっていた。もしもわが家にねずみが現れたら私は即刻日本に帰るぞと心に決めた。

そしてそれからの数日間は家じゅうの穴という穴に目張りをし続けた。しかしヒステリックに続けた作業が終わってもふと見上げると手の届かないところにエアコンの吸排気口が不気味に笑っている。まさかエアコンの口を塞ぐことはできない。ひとりで部屋にいるときは耳だけが大きくなって、部屋じゅうの音を神経質に拾った。

「カサコソ」〈ン？〉

アヤコさん宅ではなぜか捕獲が難航していた。メールで近況を伝えあっていたが、だんだんと回数が減った。三月中旬すぎのある日彼女から捕獲成功のメールがやっと届いた。あれから頻繁に目撃するようになり気合いを入れて退治したらしい。しかし捕獲成功を喜んだのも束の間、彼女は怖ろしい話でまたまた私を不安にさせた。

「ねずみ捕りはまるでゴキブリホイホイのようなもので、何回も餌だけ取られたの。粘着部分が弱いよね。で、あの捕獲したねずみはPCの人が外のゴミ箱に捨てていった。主人が捨てたところを見てたの。それからあとで主人がもう一度ゴミ箱の蓋を開けてのぞいてみたら…」

彼女の瞳がいたずらっぽくキラリと光った。

「いなかったんでしょ」

「そう。だから他の家に行っちゃったかも」

PCの男たちはたいていインド、パキスタン人。彼らはなぜ捕獲したねずみをその場で殺さないのだろうか。一命を取り留めたヤツがわが家にやってきたらと考えただけで私は腹が立ってきた。しかし一方では多くの人が目撃したこの事件、「どんなヤツなのか私も一度は見てみたいものだ」とコワイもの見たさの好奇心がうごめいた。そしてついに私も目撃してしまったのだ。幸いにもわが家の外で（やれやれ、考えただけで汗が出るわ）。

コミュニティの中にあるクリーニング店に行ったときのことだ。店の入口の手前四、五メートルのところ近づいたとき視界の中に動くモノを発見。入口のガラス扉近くでソレは止まった。私も止まった。私が動けば向こうも動くだろう。怖ろしい数秒間経ったときエジプト人の男がひとり近づいてきた。私は彼に大声で叫んで助けを求めた。彼は履いていたサンダルを脱ぐとねずみめがけて投げつけた。「このやろう」とか「あっちいけ」とか言ってたかどうかは定かではない。ねずみは動きが早くて何回やっても命中しない。そしてねずみは別の扉から建物の中に猛ダッシュして逃げて行ってしまった。体長一〇センチほどで体の二倍はある長くて細いシッポを持った「トビねずみ」である。砂漠に住むという。

その後、ねずみ騒動はだんだん下火になって、四六時中、気にしないでいられるほどに落ち着いてきた。

「うちはねずみも出たけど、大きなゴキブリも出るんだよね。イヤんなっちゃう」

B子さんちは広い道路近くに建っている。

「そして不思議なんだけど、死んだゴキブリばかりなのよね」

ははーん、なるほどね」

彼女のその話は私が二年間抱えていたある疑問を解いてくれる鍵となった。B子さんちの場所は広い道路のそばである。広い道路では朝と夜にペスト・コントロールの車がゆっくりと走る。農薬を散布しているのである。歩いているときにその車と出遭ったら急いで遠ざかる。なぜならば強烈な農薬を吸い込んでしまうからだ。

勘のいいあなたはもうおわかりですね。そうです、屋外の樹木や下水の中で暮らしているゴキブリは散布される農薬で殺られ、フラフラになって近くの家に逃げ込んで来る。そして家の中で息を引き取る。

以前アルコバールに住んでいたときに私がいつも目撃していた「酔っ払ったようによろよろしている」ゴキブリの正体もこれだったのだ（第一部「気温五〇度、湿度一〇〇%」のページ参照）。

「ここではアリも怖いよね。一匹二匹いたかと思うと後から後から列をなしてやってくる。いったいどこから侵入してくるんだろう」

「キッチンのカウンターと壁の隙間を埋めるコーキングがあるでしょ、ところどころ途切れた部

分があって、その穴からアリが出入りするのを見たことがある」

「それにアリが肉食だったなんて知らなかったね。使いかけのかつおの削りぶしの袋がアリでいっぱいになったことがある」

「うちは封を切っていないインスタントラーメンの中にアリが入り込んでいてびっくりしたわ」

「最初に来るのは軍隊でいう斥候兵アリ。彼は体内に無線か携帯電話のようなものを持っていて、遠くの仲間に連絡してるね、ゼツタイ」

日本では今や異常なほどに気密性の高い家に住むことに慣れてしまった私たちだが、苦手な存在の影に怯えたり、招かれざる客と格闘したり、砂漠の国の生活もなかなか忙しいものである

。

そしてともかく今うちにはねずみが出ていない。クワバラクワバラ。

2008.5.7

24 女性の生き方

わがままなサウジ女性！？

混雑するスーパーのレジで並ぶことは日本でもよくあることですが、サウジでもみな行儀よく並びます。ところが列に割り込んでくる女性がときどきいるのです。

あるとき大きなショッピングカートを持って列のひとつにならんでいるとひとりの女性が私の横にやって来て、自分の持つカートを力いっぱい押して、私の前に入ろうとしているではないか。

「何してるのかしら」と最初はのんびり構えていた私。というより前代未聞の行動に情けなくもうらたえて、なんと譲ってしまった私。そしてその後もこういう行為を何度となく経験することになった。

割り込んでくるのはいつも女性ばかり。サウジ女性たちのこうした傍若無人な態度はいったいなぜなんだろうか。

サウジでは「女性はとても大切に保護されている」と言われ、また欧米のレディ・ファーストに似た習慣があるが、サウジの女性たちははたして本当に「尊重」されていると言えるのか。彼女たちがいったいどのようにして大人になるのかを見てみよう。

女子に体育の授業はなし

幼稚園までは男女共学（六歳までの男子は公けの女性専用スペースに入室できる）。だが、小学校から男子校、女子校に別れる。女の子は小学校の中学年にもなると外出時アバヤ（黒衣）を着用し始める。ちょっと家の外に出るだけでもアバヤを着なければならない。

ちなみに私の住んでいる地域の女子小学生たちの制服のスカートはくるぶしまでくるロング丈。うすいブルーのかわいらしい制服だが、活発な動きができないデザインである。体育のときは着替えるのかと思ったら、そもそも女子生徒に体育の授業はないのだ。また外で遊ぶ女の子の姿はめったに見ることがなく、女の子はもっぱら家の中か塀で囲まれた庭で遊んでいる。しかし彼女たちの運動能力が乏しいのかということそんなことはなく、庭で木登りはするわ、部屋の中で逆立ちはするわ、ドッチボールもときもお手の物なのだ。

女子小学校の「保護者会」のような集まりに数回連れて行ってもらったことがある。学校は高い塀に囲まれていて、入口と言えども外から窺えないような作りになっている。先生たちは女性だけで、保護者会に父親が来ることはできない。男子で許されるのは六歳以下の男の子だけだ。

講堂では壇上の先生と客席側の母親たちとの質疑応答が行われていた。あるときは「生徒たちを庭で遊ばせてはどうか」というテーマだった。「校庭」というものはなく、あるのは、高い塀に囲まれた高い木や花壇などがあるだけの校舎の周りの庭だ。またあるときは食堂の食べ物についてだった。学校には朝食（昼食ではない）をみなで食べる食堂がある。そこで出るメニューがかぎられているので、もっとメニューを拡げてほしいというある母親からの要望だった。

そしてまたあるときは生徒たちが母親たちにダンスを披露するため舞台に並んだ。アラビックの曲に合わせて少女たちが恥ずかしそうに踊っている様子はなんともほほえましいものだった。

女性撮影は禁止

いっしょに行った女性に「自分の娘の写真を撮らないの？」とたずねた。

「子どもたちだけならいいんだけど、先生がいっしょにいるでしょ」という返事。そうなのだ、サウジでは大人の女性の写真を撮ることはタブーなのだ。

「以前、自分の娘が踊っている姿を撮ったことがあるの。あとでひとりの先生が私のところに来て、自分がいっしょに写ったと思うからカメラを出してくれと言われ、全部削除されちゃった」と彼女は言った。

かく言う彼女自身も撮影させてはくれない。女性を撮影することが法律で禁じられているわけではない。若い独身のサウジ女性はたいてい気軽に写真を撮らせてくれる。既婚女性の撮影が問題のようで、おそらく夫の度量（彼らは信仰心と言う）の問題ではないだろうかと思う。聞くところによると自分の妻の写真が他の男性に見られることをイヤがる男性がいるとのことだ。そして女性も写真に撮られることは他の男性に見られることを欲しているようであり、魂を売る行為だと思っているのかもしれない。でもそれが決まりだから、ただそうしているだけという女性も多いことだろう。

全身黒づくめの女性たち

さらに写真どころか、サウジ人女性は家族以外の男性に顔を見せてはいけないのだ。外出するときは顔も黒い布で隠す。そんな目出しルックなら顔が出てないから写真に撮ってもいいかというところもダメ。

ドバイ空港でパスポート・コントロールに夫と二人で並んでチェックを受けている女性を見たことがある。彼女は目だけ出した黒づくめスタイル。まさかパスポートに写真が付いてないとは思えないし、目出し黒づくめの写真が貼ってあるとも思えないが、とにかくその女性が顔を覆ったままでそこを通過したのには驚いた。イスラム以外の国でそんなことは通用しない。

サウジ国内の空港のセキュリティ・チェックには女性専用の個室があって、愛想のない女性職員がガムなどを噛みながら女性の身体をチェックする。病気のときも基本的に女性は女性医師に診てもらう。モスクの中でも男性と同席はできないし、女性席がある場合でもそれは二階だったり奥まった一角であったりするようだ。

女性デーとかファミリーデーというのがある。たとえばほとんどのショッピングモールでは金曜日（休日）はファミリーデーとなり、女性あるいは女性といっしょの男性だけが買物することができる日となる。実際そのルールがどこまで守られているのかはわからないが、入口で男性がシャットアウトされることもある。また町なかの遊園地などでは、平日、女性と子どものための女性デーが設けられることがある。その日は遊園地内ではアバヤを脱いでノースリーブでもタンクトップでも可能となる。青い空の下でアバヤを着ない開放感を女性たちに味わわせることができるというわけだ。こういうやり方も「女性が保護されている」という表現を成り立たせるのに役立っている。



結婚

女性たちの多くは二〇歳前後で結婚する。しかし男女が会うようなチャンスのない社会なので、結婚相手は両親が探してくる。というよりも結婚相手は両親が決めるのである。伝統的にアラブ社会では男性が結婚時、女性の家で結納金（かなり高額）を支払うしきたりがある。年齢差の大きいカップルを見ると、男性が若いとき結納金を払えなかったんだなあなどと勝手に想像してしまう。

またイスラム教徒の女性はイスラム教徒以外の男性との結婚を許されていない。ところが男性は許されている。ただしユダヤ教徒、キリスト教徒のみである。ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒は同じ啓典すなわち旧約聖書を同じくするという意味で「啓典の民」と呼ばれ、その範囲内での結婚は許されるというのが基本らしい。しかし日本人女性と結婚しているサウジ人男性が実際にいる。少なくとも二人知っている。今の時代、そういうことは緩やかなのかもしれない。

イスラム教徒の男性は四人まで妻（正妻）を持てるというのは本当だ。羨ましいでしょ？ ただし複数の妻を持てる人は地位の高い人や相当な金持ちにかぎられる。

アラブ人の出会い系サイト（結婚相手募集）123Arab.com というのがある。そこの書き込みを見てみると「第二夫人希望」などと書かれていたりするのがおもしろい。なぜか物好きな人が日本語に訳しているので興味と時間のある方はぜひ日本語版をのぞいてみてください。

パーティは深夜に！

生活のすべてがイスラムに則っているにもかかわらず、結婚式では永遠の愛を神の前で誓うことはない。永遠の愛なんてものは「インシャッラー（神がお望みになれば）」ということだからだろうか。結婚は結納金と結婚契約書のやりとりだけ。結婚披露宴は盛大に行われるものの、パーティ会場は男女別々となる。

私は招待されたことがないが、ホテルで行われたパーティに参加した人たちの話を総合すると、約束の時間（だいたい午後八時）を過ぎても花嫁は現れず、着飾った女性たちが待ちくたびれた様子もなく、大音響の中、ダンスやおしゃべりを楽しんでいるようだ。彼女たちの着飾り方も半端じゃなくて肌を大きく露出したドレスで競い合うらしい。最終的に花嫁は花婿をともなって午前〇時すぎに登場するようだ。シンデレラとは逆だ。

結婚パーティで思い出したのはショッピングモールの中にたくさんあるドレスのお店だ（第一部「アバヤとムタワ」のページ参照）。若い世代が多いこの国では結婚パーティで豪華なドレスを着る機会が多い。女性たちがパーティのたびにドレスを新調するとすればその需要は膨大だ。

私はある結婚パーティの女性たちを隠し撮りしたビデオを見せてもらったことがある。ごくふつうに着飾った女性たちの姿や顔が映っているだけだが、禁じられたものをのぞき見るときのさやかな興奮を少しばかり感じた。

〈なあんだ、けっこうみんな隠れてタブーを破っているんじゃないの〉

それにひきかえ男性陣のパーティは地味で、花嫁を見ることもできず、ほぼ約束の時間どおりに料理を食べてすぐにお開きになるようだ。しかし男性たちは妻や娘たちがパーティを終えて出てくるまで、おそらく深夜二時や三時まで延々と待ち続けるらしい。

サウジだけでなくアラブ社会では結婚時の契約書に離婚についても記載されるようだ。特に女性にとって、結婚は愛だ恋だではなく、生きていく上での大切な手段だから、結婚イコール契約なのである。でもこれは男性側にとっても大切な契約であるはず。かつては男子を生めない女性は冷遇され、離婚条項のひとつでもあったという。

結婚後も変わらない女性の姓

アラブ人の名まえは一般的にファーストネーム・ミドルネーム・ファミリーネーム。ミドルネームは父の名で、ファミリーネームは父が所属した部族の名、あるいはそこにお祖父さんの名が来るときもある。たとえば日本人の名まえで並べてみるとおもしろい。山田花子さんのお父さんが太郎で、お祖父さんが次郎だと、彼女の正式な名をアラブ風にいうと、花子・太郎・次郎・山田のようなわけのわからない名まえになるというわけだ。しかしアラブ人たちに名まえをたずねてみるとふつうはファーストネームとファミリーネームしか言わない。ファミリーネームはお父さんやお祖父さんの名ではなく姓だと言う。アラブには厳密には姓というものがないと聞いているのだが。

ともかく夫婦であっても姓は別々。生まれた子どもは父方の姓をファミリーネームとする。男子血統が大きな意味を持つアラブ社会ならではの習慣が今もさまざまに生きているのだ。

優雅な結婚生活

結婚後、どういう生活が彼女たちを待っているのだろうか。掃除、洗濯、子どもの世話などは、中流以上のサウジ人家庭では外国人のメイドがするのだ。またこの国では女性の車の運転は禁じられているので、買物は夫の仕事である。女性が買物に行くときは夫や息子あるいは雇いの運転手（兼荷物運び）といっしょでなければ行けない。

「サウジでは女性がひとりで外出することが禁じられている」と言う人がいるが、それは正確ではない。ひとりで歩いている女性もいる。ひとりで買物に出かける女性が少ないのは外が暑すぎるからだろう。

サウジでは「結婚こそが女性の幸せのパスポートである」と言われている。サウジ夫人たちは「たいていお昼ごろまで寝ているよ」とはコミュニティ内のタクシー運転手たちの一致した話だ。おそらく彼女たちはいつもファジュル（日の出前のお祈りのとき）まで一晩中起きている。二回目のお祈りズフルは昼ごろ、彼女たちはこのズフルまでの八時間ほど睡眠を取るのである。三回目のアスルは三時ごろ、四回目は日没時のマグリブ。そして午後八時ごろに夜のお祈りの時間イシャーウがくる。

イシャーウが終わると人びとは街に繰り出す。次のファジュルまでの八時間はお祈りで中断されないまとまった時間となるからだ。平日も週末も変わらない。妻から夜の買物をせがまれると夫は断われないらしい。昼間働いている男たちは寝不足にならないのだろうかと気にかかる。

母親たちはあまり教育熱心ではないようだ。子どもたちは激しい受験競争にさらされているわけでもないの子どもたちを必死に競争に駆り立てることもない。朝、学校に行く子供たちを母親として見送らないのだろうか。

「メイドが子供の身支度をして送り出すみたいよ」ということらしい。

こんな優雅な生活のせいかどうか、彼女たちは三〇代前半で四、五人の子持ちとなり、堂々とした体格の持ち主となる。

余談だが、この国では不倫の発覚は女性にとって死を意味する。女性は半身を砂に埋められ、家族、親族の石つぶてを（おそらく死ぬまで）浴びせ続けられるそうだ。なんともおそろしい刑罰だが、サウジはイランと並んで現在もお公開処刑を行っており、欧米諸機関から人権侵害を糾弾されている。不倫の男性に対してのお咎めはずっと軽いと聞いている。

割り込ませない！

サウジ女性たちはこのような環境に生きているのだ。ある意味では「大切に保護されている」ようにも見える。また公式的にはサウジの女性たちはこれで満足しているのだと表明されているが、果たして本当にそうだろうか。

列に割り込んでくるサウジ女性。彼女たちの心には「女性は保護されるもの」「女性は優先されるもの」という意識が根付いている。そしてアジア人出稼ぎ労働者がおおぜい働く国ゆえに、アジア人の顔をした私は「サウジ人より劣る存在」とみなされたのも理由だろう。

いまは事情がわかってきたので、「ゼッタイに割り込ませるものか」と思いながら私は列に並んでいる（笑）。最近では割り込んでくる女性をあまり見かけなくなった。女性たちのお行儀がよくなったのか、あるいは私に迫力が備わってきたのか、どちらだろうか。

2008.8.26

25 なぜクリスマスツリーを飾るのか

「ねえ、なぜクリスマスツリーを飾るの？」

「えっ、うっ...」

このように答えに窮するような質問をグサリと浴びせかけられることがときどきある。

あるときは「なぜ、日本はアメリカの言いなりなのか？」と質問された。これまた答えに窮するよね。

「うっ...」

外国人と話すとき、このような想定外の質問が飛んでくるので油断できない。

常日頃こういう質問に対する「傾向と対策」を考えておき、慣れておかねばならないのだが、しかし「仏教徒の日本人のあなたがなぜクリスマスツリーを飾るのか」と、真剣なまなざしでたずねられるとホントにやっかい。こう見えても私、まじめなんだ。

この質問の矛先が私に向けられた場面をプレイバックしてみるとこうだ。

キリスト教徒のレバノン人A男

「もうすぐクリスマス、ニューイヤーだね。何か予定はあるの？」

私「な～んにもない」

A男「ボクは正月は9日間レバノンに帰るよ。クリスマスはここ（サウジ）で友人たちとパーティだよ。クリスマスツリーを飾って、ダンスを踊って...」

この「クリスマスツリーを飾って、ダンスを踊って...」というくだりで、A男の目がいたずらっぽく弾んでいた。

もうひとりそこに同席していたイスラム教徒のエジプト人B子をそれはあきらかに宗教的に挑発する内容だった。

「男だけのダンスパーティ？」

と、まず私。そしてB子と私は手をとりあって笑いころげた。

独身のレバノン人女性をこの国で見ることなどないから揶揄ったのだ。

つぎにB子が「なぜクリスマスツリーを飾るのか」とA男にたずねた。

「よくは知らないけど、西欧から来たやり方で、レバノンでもツリーを飾るんだ」

イスラム教徒を挑発しようとしたわりにおとなしい答えが返ってきた。するとB子が「知らないの？ キリストは木の下で生まれたのよ。だからあんたたち（キリスト教徒）はクリスマスツリーを飾るんじゃないの？」

キリストが木の下で生まれたというのは初耳だった。

「たしか、馬小屋で生まれたのではなかったか...」

〈英語で馬小屋ってなんていうんだったかな...〉　しかしここでいいかげんなことを言うとやっかいだ... と、私がひとりうじうじ考えている間にもB子の勢いは止まらず、

「キリストが木の下で生まれたっていうことは、たしかクルアーンにも書いてあったはずよ」

と、すごい剣幕ですごい早口でまくしたてている。

A男は自分で蒔いた種ながら、相手を熱く燃えたぎらせてしまい、すこしうろたえ気味である。アラビア語と英語がグチャグチャに入り混じった会話が火花を散らしていた。

「日本でもみんなクリスマスツリーを飾るよね。ツリーを飾るなんて特別なことじゃないさ。

ねえ、」

とA男がとつぜん私に振ってきた。B子が私のほうを向いて言った。

「仏教徒でしょ？ 仏教徒のあなたがなぜクリスマスツリーを飾るの？」

はっと気がついたとき、火の粉が私の上にも降り注いでいた。

正しいイスラム教徒であることを誇りに生きているB子は、挑戦を受けたら決して後に引かないタイプ。一方、いたずら好きのA男、キリスト教徒といえども、それほど熱心な信者ではなさそうさ。

「そんな一千三百年も前のこと、だれも証明できないよ」

とA男。クルアーンに書いてあるという発言に対して言ったのだ。

「キリスト教の聖書は人間の言葉、クルアーンは神の言葉」

とB子がきっぱりと言い放った。

ときは11月29日、インド・ムンバイで起きたイスラム過激派の同時テロが収束された日なのだった。熱烈なるイスラム教徒の心情、ああ、いまだに理解する手がかりがつかめない。

お気づきかと思いますが、A男は歯科医のヨーセフ先生、B子は内科医のハナ先生。（第二部「[歯科治療体験](#)」のページ参照）

二人はともに四〇歳前後で独身、出身国は違っていてもアラビア語で会話ができる同僚同士だ。冗談を飛ばしては笑い合い、真剣な面持ちで議論しあうことも多い。流暢に英語を話す二人と違って私はいつも思っていることを半分も言えない。それでもなぜか二人は私を、一五歳ほども年輩の私を、仲間に入れてくれたようだ。きっとアラビア語を習いたいという人なつこい日本人がもの珍しさに違いない。

あるとき私は気になっていたことをハナ先生にたずねてみた。

「二人は結婚しようと思っているの？」

彼女は恥ずかしがるわけでもなく顔色を変えるわけでもなく淡々とそれを否定した。

「彼はキリスト教徒だし私はイスラム教徒だから私たちは結婚はできないの」

さて私はこの年末年始はサウジで過ごす予定です。よいお年を。

2008.11.30

私が住んでいる家にはとても広い庭がある。私は当初からその広い庭を緑したたる熱帯雨林のようにしたいと考えていた。入居する際には破格の安さで芝生や幼木を植えてもらい、さらには私好みの遊歩道づくりにもひとりで挑戦してみた。しかし砂漠気候のこの国では水やりはたいへんな仕事。それに敷石を敷く作業も超重労働。軽い庭いじりどころではなくなった。熱帯のジャングルのような庭を完成させるべく、手助けしてくれる人を探していたとき、バングラデシュ人の若者と出会い、彼を雇うことになった。

彼と初めて出会ったのは二年前のある朝だった。ある人を訪ね、帰ろうとして建物から出たところで「マダム、お宅のヴィラのそうじをやらせてくれないか」と声をかけられたのだ。鮮やかな黄色いつなぎのユニフォーム姿で道路の掃きそうじをしていた彼は、真っ白な歯を見せてニコニコと笑いかけてきた。私は彼の明るい笑顔が気に入ったので、後日うちを訪ねるように言い、私の携帯の番号を伝えた。

彼はすぐに私の携帯にうれしそうに電話をかけてきた。約束を確認するためだったのだろう。そして約束の日時にやってきた。庭を案内し仕事内容を説明し、すぐに金額の交渉が始まった。彼は当然ながら高い金額を要求してきた。日本人なんかチョロいと思っているようで強気である。でも残念ながら私はけっこう渋いのだ。それに事前に相場も調べてある。

「いいわね、あなたにしてほしいことは庭のそうじじゃなくて庭の水やりと雑草取りよ。とにかく最初の一カ月間は試用期間。週三回で一回一時間、一カ月一〇〇リアル（約三千元）。イヤだったら別の人に頼むから」

と私は言った。彼は明るい笑顔を失くして無然たる表情になった。

「わかったよ。じゃあ、来月からは月二〇〇リアルにしてくれるか」

「いますぐ約束はできない」

「じゃあマダム、せめてあなたの友だちを紹介してくれよ」

彼は笑顔を取り戻して言った。なかなかの瞬発力、展開力である。ペしゃんこにされてもへこたれない粘り強さを身につけている。そうじなんかしてるよりもセールスマンにでもなったほうがよいぐらいだ。

「ええ、いいわよ、探しておくわ」

交渉は一段落し、最後に彼は言った。

「水をくれ、水を」

初回の会話はざっとこんな感じだった。というといかにもすんなりことが運んだように見えるが、そのような滑らかな会話はじつは存在していない。彼の持っている英語の語彙がきわめて少ないからだ。彼はサウジに出稼ぎにやってきて三年ほど経っていたようだが、英語は其中で覚えたものだ。彼のサウジ英語のほうが私に比べて実践的と言えるかもしれないが、かなり胡散臭いデタラメ英語なのである。また紙に書いても彼は上の空である。英語の読み書きができないからだ。

彼の名まえは何回聞いてもうまく発音できないし覚えられないので、苗字の頭文字をとって「モーくん」と呼ぶことにした。いま二八、二九歳で、結婚したばかりの妻を故国に置いてきている。二〇歳そこそこの妻から「寂しいから早く帰ってきて」という電話が団子状態でかかってきて困っていると言う。団子状態というのは妻の気分には周期があるからなのだろう。電話代もバカにならないだろうにと思う。彼の携帯電話は、通話カードを購入してチャージした金額分だけかけられる。通話カードを買えなければ電話はかけられない。

彼には両親と学齢期の妹が三人いて妻も自分の家族といっしょに暮らしている。そしてその六人の家族の生活費すべてを自分が稼いで送金しているのだという。

「家はどこにあるの？」

「ダッカ」

ダッカは大都会だと思うのだが、お父さんの職業をたずねるとスイカ作りの名人だということから、家業は農家ということだろう。

私には目標の庭づくりがあったからモーくんには細かく仕事を指示した。絵を描いたりジェスチャーを用いたりして私の求めていることを彼に説明するのは骨の折れることだったが、徐々に彼が口うるさい私の希望を飲み込むようになった。そして彼は四カ月目に入り、月給一五〇リアルになった。さらに週一回、乗用車の洗車代一〇リアルも渡していたので、彼が望んだほぼひと月分の金額になったのである。

私の庭は一年が過ぎた頃から加速度的に庭らしくなってきた。毎日、庭中に水を撒き続けた結果、あちこちから木々が生長し始めたのだ。私が植えたものもあり、切り株として残っていたものが知らない間にぐんぐん大きくなったものもある。一年中三〇度以下の気温にはならないか

ら木も草も生長し続ける。花も休みなく咲き続ける。

そして当初めざした熱帯雨林は止めることにした。あまりにも生長が早く、木が大きくなりすぎて、剪定や枝打ちが追いつかないことがわかったからだ。高い木の上には鳥たちが頻りに巣をかけたやってくる。それも厄介だったからだ。

モーくんは私以外にも何軒かの客を抱えていたようだ。また二、三週間、私が出かける時には彼に毎日水やりに来るように頼んだ。多くのバングラデシュ人がコミュニティ内の各家庭で副業に励んでいる状況から見て、彼らを雇っている会社はそうした副業を禁じているどころかむしろ奨励しているのかもしれない。

そんなふうに彼はあれこれ一生懸命働いて、今年の冬には会社から長期休暇をもらいダッカに帰った。ジッダ-ダッカ間の運賃は四万円弱。会社はもってくれず自分持ちだと嘆いていた。モーくんはダッカから私に電話をかけてきた。何やらみやげを買ったよ、と言っていたが、ほんとうの理由は彼の不在中に私が別のガーデナーを雇ってしまわないようにというご機嫌うかがいであったと思う。そして帰ってきたとき彼は私に「バングラデシュで一番いいサンダル」をくれた。なるほど履き心地のいいサンダルで、私はこわれるまで愛用した。モーくんは商売人になったら成功できるのにとつくづく思った。

一月のはじめごろのことだった。約束の時間になってもモーくんがやってくる来なかった。おかしいと思ったが黙って様子を見ていたら夕方ひょっこりやってきた。お腹がずっと痛い。きょうジッダの病院に行ってきたら手術が必要だと言われた。きょうは金の工面のために忙しかったのだと言う。彼は大きなお腹をさすって笑った。バングラデシュ人にしては彼は太っていて大きなお腹をしていた。そういえば彼はときどきお腹が痛いと言っていた。病名はわからない。

それから数日して彼はいとまごいをしにやってきた。故国に帰って手術を受け、また戻ってくると言う。そして自分に代ってしばらく私の庭で働いてくれるバングラデシュ人を連れてきた。モーくんよりも細身のイケメン、イリアスを連れて来た。腹痛に耐えながら最後の引継ぎもきちんとしてくれた。旅費の足しになればと思い、私はひと月分の給料を足し増しして渡した。

彼が病気のためにバングラデシュに帰るといふとき所属しているサウジの会社からもらってきた英文の契約書のようなものを見せてくれた。彼は自分では読めないから私に読んでくれという。そのとき初めて彼が月給五千元ほどで雇われていたことを私は知った。もちろん彼らのスポンサーである会社は給料以外にもスポンサー（身元引受人）としての支援をしてはいるのだろうが、それはかなりショッキングな金額であった。

彼はコミュニティの外に住んでいる。場所はわからない。五、六人の仲間とともにエアコンの付かない粗末な小屋に住み、畑を作って野菜を自給している。毎日の食事は当番制で作り、仲間とともに食事をしているようだ。

この国では国王の慈悲により、主食であるパンと米は極端に安く購入することができる。パン五、六個入った一袋は約三〇円。バゲット一本も約三〇円である。乾豆や香辛料なども極端に安い。しかし肉や乳製品などは、日本より多少安いぐらいだから彼の食卓には上らないだろう。



荒れ果てた粗末な家々が建ち並ぶ一角（この写真は本文と無関係です）

彼はおおぜいの仲間とともに大きなボンネットバスに乗って毎朝コミュニティにやってくる。仕事は朝七時から午後四時まで。昼休みは一時間。その昼休みと夕方の時間帯に副業をこなす。休みは金曜日だけである。

彼の月給の金額はバングラデシュ国内の一人当たりの平均年収に当てはまるという。しかし消費社会のサウジに暮らせば欲しいものもあるにちがいない。少しでも多く故国に送金もしたいだろう。彼らが副業を得ることに必死であるのはこうした現実があるからなのだ。モーくんのたった一つの贅沢は携帯電話を持っていることぐらいなのかな。十一月三〇日、モーくんはバングラデシュに帰っていった。

2008.12.16

27 出稼ぎ外国人労働者（2）

よくなったらまた戻ってくるからと言い置いてモーくんは行ってしまった。手術は無事に終わったのだろうか。ひと月経つのに彼からの連絡はない。イリアスに訊いてみるとモーくんはもう帰ってこないよと言う。

モーくんとは二年間ほどの付き合いだった。徐々に意思疎通がうまくいくようになり、彼はとても頼りがいのある存在となっていた。最初のころは彼は自分のやり方を押し通したが、私が繰り返し「いやダメよ、こうやってちょうだい」と言い続けたので、わがままな客に歩み寄ることを学んだのだと思う。そのモーくんがいなくなり、私は振り出しに戻ってしまった。イリアスと一からやり直しである。

イリアスも笑顔の美しい青年であるが、サウジ歴が短く英語がまるでできない。ほとんどの場合、現地現物主義で会話することになる。モーくんもそうだったが、イリアスもかなり頑固である。自分の知っているやり方を変えようとししないのだ。これは性格の善し悪しではなく、彼らの仕事文化とでもいうべきものなのだろう。例えば、いい仕事をしたら給料が上がるかもしれないとか客に満足してもらったら気分がいいとかそういうものを持っていない。こうした文化の違いとでもいうべき問題はそこらじゅうに転がっている。

話は前後するが、私が今の家に引っ越すとき、室内清掃に従事するバングラデシュ人が「そうじはいらないか。週一回で月二〇〇リアルだ」と売り込んできた。私は試しに入居前のそうじを依頼した。床とたくさんある空っぽの棚やクローゼットの拭きそうじを頼んでみた。やってきた二人のバングラデシュ人の仕事ぶりは想像したとおりだった。棚はしぼった雑巾でまあよく拭くだけ。手が届かない高い場所は見ても見ぬふり。床はびしょびしょに濡れたモップを軽く動かして終わりである。私は支払う予定の金額分の仕事を彼らに求めた。お手本を示してやりなおしを指示した。彼らは不機嫌そうに黙々とされたことだけをした。そして帰り際には「次回はいつ来ればいいか」と問うた。その部分だけがプロだった。

ついでなのでジッダ空港で働くバングラデシュ人についても書いておきたい。ジッダ空港に車が着くと空港のカートとともに目つきのよくないバングラデシュ人が一人かならず車のトランクの前に陣取るのである。トランクを開けるや否や彼は奪うようにスーツケースやキャリーバッグをカートの中に乱暴に投げ入れるのである。頼まなくても勝手に荷物を運んでくれる。チェックインカウンターで荷物を預けるところまでついてくるが、途中でお金を渡して「もういいよ」と言えば、サッと消えていく。お金を渡すときも金額を吹かけられるから要注意である。最初から頼みたくなければ車のトランクを開けないことだ。そして強い口調で追い払ってからトランクを開けなければならない。

彼らは空港の赤帽＝ポーターである。昔、東京駅で見かけた赤帽さんは粋でキビキビとした動作でカッコよかったと記憶しているが、こちらの赤帽は強引というよりほとんど暴力的である。料金は一回に一〇から二〇リアル（約三〇〇～六〇〇円）のことがだが、頼んでもいないのに強引に運んでいくそのやり方が腹立たしい。サウジ人などはポーターに仕事を与えることもザカート（喜捨（きしゃ）イスラム教徒の五つの義務のひとつ）の精神として対応しているから特別なこととも思っていない様子である。

私をはじめジッダ空港に降り立ったときバングラデシュ人のポーターなどはいなかった。あるときジッダ空港の到着ロビーに顔の浅黒い男たちがおおぜいパスポートを手にして並んでいた。思えばそこにいた男たちこそその後ポーターとして働くようになったバングラデシュ人たちだったのだと思う。今では空港のあちこちで暗緑色のつなぎを着た彼らがうろうろと動き回っている。飛行機で到着したときもカートを持ってかならず近寄ってくる。逃れるために相当のエネルギーが要るからしかたなく荷物を預けることになる。

空港にいる彼らは一様に人相が悪い。客を探して金を払わせ、ふんだくれそうな客ならさらにふっかける。過酷な競争の中に生きるいうなれば「笑わないセールスマン」たちなのだ。

世界最貧国といわれるバングラデシュ。そこから来ているおおぜいの出稼ぎ労働者たち。サウジでは国籍によって給料がランキングされている。仕事内容からもわかるようにバングラデシュ人はその最下位に配置されている。無表情な彼らは学歴もなく、英語もしゃべれない。車の運転免許すらも持っていなければいったい何ができるだろうか。

本国の貧しい環境が彼らを追い立てているのは確かなことだ。仕事文化などはそもそも存在しないのかもしれない。仕事の質だとマナーだとかそんなものは不要かもしれない。でもせっかくサウジにやってきて誰かがそういうことを気づかせてあげたらいいのと思う。でも残念なことにはサウジ人にもそういうものがないのだ。

コミュニティ内で働く外国人出稼ぎ労働者たちも国籍によって「働く場」がほぼ決まっている

。「給料のランキング」と構造は同じだ。この国では人種差別はなく国籍差別があるのだ。

エアコンの修理などの住まいのメンテナンスは青いつなぎを着たインド人とパキスタン人である。大工仕事を頼むと職人風のフィリピン人がやってくる。タクシーやバスの運転手たちは、エジプト人、スーダン人、バングラデシュ人などであり、若いサウジ人も少しだけいる。レストランの給仕はネパール人。女性用のスポーツ施設ではフィリピン人の女性たちがスポーツインストラクターや美容師として働いている。本国でちょっとかじったことがある程度の能力のように思うが、彼女たちはみな朗らかで英会話も滑らかだ。男性用の床屋さんもフィリピン人。理容師はなぜかオカマのような男性が多いらしい。



病院（コミュニティ内）の医者はエジプト人が多い。あとはナイジェリア人、パキスタン人、レバノン人、インド人などだ。看護師はフィリピン人女性が圧倒的に多い。また私の歯石取りをしてくれたのはフィリピン人の歯科衛生士だ。「今度アメリカに行って資格を取ってくるんだ。そうすると給料もあがるからね」と言っていた。それってもしかしてそのとき資格なしで業務してたってことか。まあ傷つけられもしなかったからいいけど…。インド人女性の看護師や事務員も数人見かける。彼女たちは英語が堪能なイスラム教徒である。そして病院内の清掃はバングラデシュ人の女性たちである。

スーパーマーケット（コミュニティ内）の店内で働いている男性たちは、エジプト人、ネパール人、バングラデシュ人、フィリピン人である。また個人宅で多く雇われるメイドはほとんどがインドネシア人であり、運転できない奥さんのためのお抱え運転手はフィリピン人が多い。

そしてそれぞれの部署の上位のほうにはたいていヨルダン人やレバノン人など隣国のアラブ人が配置されていて、トップにはサウジ人がいるのである。場合によっては欧米人がサウジ人の補佐役として配置されていたりもする。

こうして見てみるとこの国で働く外国人の多くがイスラム教徒であることがわかる。インド人はたいていヒन्दゥー教徒だと思われがちだが、イスラム教徒も少なくないのだ。フィリピン人は異教徒だが、彼らには英語力がある。そしてほとんどのフィリピン人は高卒だと思う。彼らは器用で働き者だから彼らより学歴の低いバングラデシュ人を束ねる立場になる。

スーパーのレジで働くネパール人



学歴といえば、大卒以上の男性でないと妻や子どもをサウジに連れてこれないらしい。現在経済成長が著しいインドから来ている人びとは貧富や学歴の差が激しく、欧米人や日本人と同じようにヴィラをあてがわれて家族といっしょに住める人たちもいれば、単身でやってきてランクの低い仕事に就いている人たちもいる。夫婦でやってきて共働きしながら滞在している人たちもいる。

イスラム教徒にとってこの国に働きに来るといことは大きな付加価値がついていることを意味する。すなわち聖地巡礼に行くことができるということだ。家族で、職場の仲間たちと、あるいは会社がバスを仕立ててくれて従業員たちを巡礼に連れて行ってくれるのである。「ハッジとウムラ」のページで書いたようにメイドとして個人宅で雇われている女性も巡礼に行けるようにサポートしてもらえるのである。

サウジ人も含めたこの階層化された社会の仕組みは、神の前の平等を説くイスラムの教えに守られながら、絶妙な適材適所を生み、調和した社会を保っているように思われる。しかしそこにもさまざまな問題があるようだ。

サウジでは一九六二年に奴隷制度が廃止された。人類の歴史上の最後の奴隷解放である。そして現在の安価な外国人労働者の受け入れが奴隷制度に代る制度だとして批判する意見もあるという。

奴隷出身のアフリカ系の人びと、そのままサウジに居ついてしまった巡礼者や出稼ぎ労働者たちも少なくないと聞く。そういう人びとがサウジの貧困層を形成している。彼らはサウジ国籍を取ることもできない。

ジッダの町では物乞いをするアバヤ姿の女性をよく見かける。場所柄、ほとんどはアフリカ系の女性である。顔を出しているからそれとわかる。明らかに男性と思われる輪郭のアバヤ姿を目撃したこともある。車が赤信号で止まるたびにかならず物乞いや物売りの女性が現れる。お菓子屋さんのお前でお菓子屋さんの前なのかわからない。

ある女性から聞いた話である。「数年前、パレスチナ難民の二世である夫は、サウジ人化政策（後述する）のために職を追われた」と言う。彼女の夫はサウジで生まれ育ったのだからサウ

ジ人になれないのかと質問したら、それはできないのだという。別の人にも「パレスチナ難民はサウジアラビア国籍を取得できないのか」と聞いてみた。すると「二〇年ぐらい前には自由に取れたが、今はできない」と言う。パレスチナを追われた人びとはいつかは故国に帰りたいという思いを持ち続けてきたにちがいない。しかしサウジ人になれず外国人として働くのでは、職業上の権利や待遇で差別を受けることになる。

「サウダイゼーション」という言葉がある。日本語では「労働力のサウジ人化政策」という。七〇年代以降急激に経済発展を遂げてきたサウジアラビアでは人口が爆発的に増加し、二〇代を中心とする若年層の失業者が増大した。そうしたサウジの若者たちを救済するために外国人を減らしてサウジ人の就労人口を増やす政策が九〇年代から始まった。しかしその取組みは現在に至るもあまり成果が上がっていないらしい。

いわゆる3Kといわれる仕事や単純作業に就いているサウジ人をほとんど見たことがない。私が見かけたことがある働くサウジ人といえば、空港のセキュリティチェックやパスポートコントロールであり、ハイウェイで検問に当たっている警官であり、紅海に船を出すときに許可をもらうコーストガード（沿岸警備隊）だったりである。またジッダの大きなスーパーではレジを打っているサウジ人を見かけることもある。共通しているのはエラそうに人に許可を与えたり金の収受に関わる場所にいることだ。ほとんどが人の顔を見ずに無表情に仕事をこなす若者たちである。パスポートコントロールですらほとんどこちらを見ないのだ。それに年配のサウジ人が働いている場面に出くわしたこともない。

ある日本人男性が言うには、サウジ人たちは、パソコンと携帯電話で仕事のすべてをこなしているという。要するにパソコンの前に座り、携帯電話で話しているだけで仕事をした気になっているということらしい。

コミュニティ内で運転手として働く二人のサウジ人の若者を知っているが、人なつこくてさわやかな笑顔を向けてくれる好青年たちなのだが、二人とも英語は通じない。



最後にもうひとつ例外的な若者を紹介しよう。彼は郵便局で働くバングラデシュ人である。エアコンの効いたオフィス内での仕事は清掃や庭園管理に従事する人たちと比べてとてつもなくラッキーだと思う。窓口でいつも笑顔で迎えてくれる彼とはすぐに仲良しになった。日本に送るモノはあまりないが、日本からは定期的に荷物が送られてくる。日本の食料品であったり、こだわりの化粧品であったり、本だったりする。

じゃあ郵便局に足を運ぶ必要はないじゃないかと日本人のあなたは思うだろうが、こちらは「元ペドウィン」の国である。郵便配達の制度があるだけでも私は感動している。早い話がこの国には住所というものがなく、郵便物を受け取りたい人は最寄りの郵便局に私書箱を置くというシステムなのだ。だから「そろそろアレが届くころだなあ」とタイミングを見計って、暑いさなか郵便局に足を運ばなければならない。一日も早く受取りたいときは窓口に日参することになる。そこで窓口で働くアーディルにあるとき頼んでみた。「私宛や夫宛の荷物が届いたら電話してくれないか」

それからというもの彼は荷物が着くたびに私に連絡してくれるようになった。決められた時間内に決められた仕事しかないという仕事文化が根付いている彼らではあるが、アーディルのような人だっているのだ。私にとってそれはとてもありがたいことである。冷えたペプシコーラをときおり彼に差し入れてお礼を言うぐらいしかしていない。彼にお金を渡したことはない。それでも彼はいつも連絡してくれるし、終了の時間に間に合わないときも一〇分ぐらい待っていてくれたりするのだ。

彼は英語の読み書きも多少できるし、日常の英会話力も持ち合わせている。にこやかに対応し、客の求めていることに応じる心も持っている。同じ国の出身であってもこのように能力やスキルの違いで就ける業務や給料に差が出てくるのだ。あるいは余裕のある状況にいるからそのようにふるまえるのかもしれない。

2008.12.16

美容外科

一月、女三人でジッダに行った。サウジ人とエジプト人と日本人の私という顔ぶれで、エジプト料理を食べに行くのが目的だったが、彼女たち二人にはもう一つ別の目的があった。夫を伴わないで行きたい場所があるらしかった。「ある病院に行くから食事に行く前に付き合ってね」と前日になって言われた。付き合いたくなくても運転手付きの車を出してくれるサウジ人サファーには逆らえないし、それにご主人に内緒で行きたい病院というものに好奇心がわかないわけがなかった。「ええ、いいわよ」私はいつものようにこのこ付いて行った。

どこをどのように走ったのか、気づいたとき時刻はそろそろ夕刻にさしかかかっていて、車は閑散としたジッダの裏通りをゆっくりと進んでいた。やっと見つけたビルの前で車を降りると暮れていく空を三人で心配そうに見上げたことが忘れられない。自動ドアの中に入るとテナントビルになっていてクリニックの表示があった。エレベーターに乗り、めざす階に着いた。空間がやたら無駄に使われるのがこの国の建築物のデザインの特徴で、そのフロアもそのクリニックだけが無駄に長く広い通路の先にあった。

扉を入ると受付と待合室があった。私たちはさらに「女性用の待合室」に入ってソファに腰かけた。そこは美容外科のクリニックだった。話は車の中であらかじめ聞いていたが、サウジにも美容外科があるなんてちょっと信じられない気持ちだった。しかしあっても何らおかしいことはない。二〇分ほど待たされてから私以外の二人（四〇歳代）は診察室へと呼ばれて行った。私もいっしょに診察室に行かないかと誘われた。私がすごく知りたがり屋だということを彼女たちはよく知っているからだ。つい腰を浮かして付いていきそうになったが、診察室まで付いていくのはあまりにもミーハーじみていると思ったのでやめた。

それからまた待つこと二〇分、彼女たちは戻ってきた。彼女たちいったいどこを治療しにやってきたと思いますか。大きな目をさらに大きくする必要はなし、高い鼻をさらに高くする必要もなし、たるんだ皮膚をリフトアップする必要はまだなさそうだし…。じつは彼女たち、シミ取りの薬と化粧品をもらいにきたのだ。前日その話をはじめて聞いたとき私は思わず笑ってしまった。だって彼女たちはシミが目立つほど色が白くない。真っ黒な黒人をレベル10として色の白い日本人を1とした場合、彼女たちの肌色濃度は5ぐらいかな。夏休みに真っ黒に日焼けした少女という感じだ。しかし彼女たちは二人とも最近顔にシミが増えてきたことが気がかりなのだという。たしかによく見るとそばかす状の小さなシミが両頬に広がっている。

診察室から戻ってきた二人は数種の薬やクリームを手にしていた。

「これから毎日これをつけるのよ」

「そうね、日焼け止めクリームをちゃんとつけないとね」

「これからはファンデーションもつけたほうがいいね」

と、このへんの会話はアラビア語なのでほとんどは私の想像。でも英語の単語が洩れ聞こえていた。

〈皮膚が焦げるほど強烈な陽射しを浴びるこの国でできるのかな。UVカットだ、日焼け止

めだ、ファンデーションだ、って〉

それから一人がとつぜん私のほうを向いて言った。

「ねえ、私たちを診てくれたドクター、ものすごくハンサムだったのよ。だからやっぱりあなたもいっしょに行けばよかったのに」

彼女たちはとてもハンサム好き、メンクイ。

日本人の私からすればアラブ人の男性の顔はたいていメンズファッション誌を飾れるほど「イケてる」と思う。だから私にはこの国でのハンサムの定義がよくわからない。ついでに彼女たちがシミに悩むのもよくわからない。しかし私はひどい近眼だということを忘れていた。両目ともに視力は0.1以下。メガネが好きじゃないのでふだんはかけていないから、メガネを通して見てあっと驚くことがある。だからもしかしてアラブ人男性がみんなハンサムに見えたり、彼女たちの顔にシミがあるのも気づいていないだけかもしれない。

第二夫人

最近、若いサウジ人女性たちと知り合いになった。二〇代の後半で独身、仕事を持ち、それぞれ自分で見つけたボーイフレンドがいる。彼氏と二人で堂々とデートし恋愛を楽しんでいる様子。

「父は別のサウジ人の男性と結婚するように言うけれど、私は彼と結婚したいの」と一人の女性はうれしそうに言った。〈いったいどこで出会ったのだろうか〉この国ではいまだ自由恋愛はほとんどないと聞いていたから、不思議に思って一人の女性にたずねたら、ある大きなショッピングモールの名まえを恥ずかしそうに言った。〈そ、それはナンパってモノじゃないか！〉。きびしいきびしいと言われていても若者はちゃんと抜け道を知っているものだ。そうした新しい生き方の女の子たちがいる一方で伝統的な結婚をめざす女性もいる。

ある独身女性から「第二夫人にならないかと言われていてとても悩んでいる」という話を聞かされたことがある。アラブ諸国以外では考えられないことだが、そのプロポーズは何を意味するのか。そして彼女が悩む理由は何か。

一夫多妻制のサウジでは「私の姉は〇〇さんの第二夫人です」などと胸を張って言えるのだ。だから聞いているこちらも〈なるほどそれはいい結婚をしたということなんだ〉と思うのだ。第二夫人を持てるということはかなり裕福な男性であり、社会的地位も高いはずだ。

でも悩んでいたその女性はやっぱり気が進まず断わってしまった。彼女が断わった理由は、そう、きっとあなたも想像してるとおり、嫉妬心。私は複数の妻が制度として認められている社会では女性たちもそのことに寛容なのだと思っていた。たとえば日本人の女性が自分の夫に愛人がいるのを許せないのは日本の社会や制度や価値観がそれを認めていないからなんだと思っていた。一夫多妻制が認められていても女性たちのホントの気持ちは複雑そうだ。

結局断わった彼女は潔くてカッコいいなあとは私は彼女を見直したけれど、もしも彼女が進んである人物の第二夫人になったならば、それはそれで興味深い。第二夫人の生活というものを垣間見てみたかったとも思うから。

避妊とダイエット

「私ね、避妊リングをつけてるのよ。もう子どもを欲しくないから。でも夫はまだ二人ぐらい欲しいって言うてる。とんでもないわ」

と彼女はにこやかにそう話したが、どことなく切実な思いも秘めているようだった。三〇代の前半ですでに五人の子持ちのローナ。最初の子が生まれて以来の約一〇年間、彼女はいつも幼子を抱えた生活をしてきた。現在いちばん下がやっと二歳になって夜泣きから解放されたようだ。自分の家族からも夫の家族からも遠く離れて暮らしているし、メイドを雇ってもいないので、彼女は一日中ほとんど休む間もなく働いている。

「私が子どものころは母の手伝いをたくさんしたもののなのにうちの娘たちときたら、ぜんぜん手伝いをしてくれない」

と愚痴ってもにこやかである。

彼女はまだ若いし元々とても美しいから私は気づかないでいたが、たしかにいつも疲れているようだ。手際よく家事をこなし、楽しそうに子どもをからかったりしていてもそれは精一杯の虚勢なのかもしれない。

「いちばん下の娘が幼稚園に入ったら自分の時間を持てるようになるわ。あと二年ぐらいかな。そうしたらあなたのヴィラに遊びに行けるし、レストランに食事にも行けるわ。でも今はまだ私は身動きがとれないのよ。それにダイエットもしなくちゃ、一〇キロぐらい」

彼女は少し恥ずかしそうに、でもケタケタと声をたてて笑った。小さな子どもを抱えた女性が陥る慢性的な疲労感、孤独感、焦燥感が彼女の言葉にいっぱいあふれていた。それにもうひとつ驚いたのは彼女が体型を気にしていたことだ。

この国では若者を除いて「おとな」はたいてい太っている。後ろ姿を見れば若いかわりでないかは一目瞭然だ。観察力を磨けば既婚か未婚かもわかるほど。だからもしも顔を隠した女性をナンパする場合も間違えることはない。

アラブ社会では太っていることが豊かさの証明であるような感覚が今なおある。でも太っていると糖尿病になりやすい。彼女は父親を糖尿病で亡くした経験もあるから、糖尿病にならないようにと考えているかもしれない。

サウジを含む中東湾岸諸国は世界トップクラスの糖尿病罹患率を誇っている。これは誇れるものではないし、糖尿病の大部分は自己管理で克服できる病気だ。ムスリムたちは常日ごろから断食の行（ラマダンの時期以外にも断食はある）で自己抑制力を培っているのだ。肥満や糖尿病を減らすためにその自己抑制力をぜひとも発揮してほしいものだと思う。

2009.1.12

外国人と話すとき政治と宗教を話題にするなどよく言われる。伝説のようなこの言葉は現在でも死語ではなく、実際私もそのような気分でサウジにやってきた。ところがアラブ人を相手にするときはこの言い伝えは通用しない。政治と宗教についての空気を読まないといけないということをつくづく感じる。アラブ人と話すときは政治と宗教の話題に触れないわけにはいかない」と。

アラブ人女性たちは、親しくなると私が困るような質問をわざわざけしかけてくる。たとえば、

「仏教ではこの世界を創造したのは誰なの」
そんなことわかるわけないじゃん」

と憤然としてみても生真面目に迫ってくる。イスラムに関する本を数冊読んだぐらいではイスラムの人びとの宗教的内面まではとても理解できない。

「あなたはイスラエルをどう思う？」

難しい政治情勢の中に置かれたアラブ人女性たちが政治に無頓着でいられないことは理解できる。しかしこれも困った質問。私はその質問に対し次のように答えたことがある。

「パレスチナ問題についてはよく知っています。まず日本人の多くはアラブ人の味方だと思います」と。間接的に私もアラブ人の味方であると伝えたのだ。ここで「熱烈なるシンパシー」を語りだしたら、たぶん收拾がつかなくなる。だから相手へ軽いシンパシーを伝えるに留めるのが肝要かと。

二〇〇八年一二月、イラク人の記者ザイディ氏がブッシュ米大統領（当時）に靴を投げつけた事件はよく知られていますね。事件のあった一四日から三、四日経ったある日、エジプト人女性のアーイシャは英語版ユーチューブ（YouTube）の動画でその事件の様子を私に見せてくれた。私たち二人はいっしょにその映像を見て大笑いしたのだが、アーイシャはすぐに悲しそうな表情に変わってしまった。

「私はジョージ・W・ブッシュを憎んでいる。決して許せない」
という内容の言葉を声を低くして淡々と話し出した。

「サダム・フセインが殺された日のことをおぼえてる？」

憶えているわけもなく首を横に振った。

「たしかにサダム・フセインはよくない指導者だったと思う。でも彼はムスリム（イスラム教徒）なのよ。そのムスリムをブッシュはよりによってハッジの最中に処刑したのよ」

サダム・フセイン元イラク大統領は二〇〇三年一二月に身柄を拘束され二〇〇六年一二月三〇日に絞首刑となっている。そういえばその翌日の三一日から一月二日まで、イード・アル・アドハ（犠牲祭）とハッジ休暇で夫は仕事が休みだったことを思い出した。なるほどハッジのさなかに殺されたのだ。イスラム教徒たちがハッジというものをどれほど高揚した気分で迎えるかを「国際都市ジッダ」のページで書いたので思い出してほしい。私は彼女の言いたいことは深く理解したが、彼女にかける言葉はまるで浮かんでこなかった。

また別のときにはこんなことがあった。以前に何度も紹介したことがあるレバノン出身のローナ。彼女は二〇〇七年六月のある日以降しばらくのあいだ電話をかけても電話口に出てこなくなった。何が起こったのかわからず、しばらくは彼女と関わらないでいたのだけれど、彼女のご主人と連絡が取れて会うことができた。

「彼女は病気なんだ。レバノンで戦争になっている。彼女の実家の近くで起こっている。彼女はとても傷ついてるんだ」

そんな内容だった。その年の5月に始まったレバノン北部にあるパレスチナ難民キャンプでのレバノン軍とイスラム過激派組織の衝突が長期化し、レバノン内戦以来の大規模な戦闘が続いていた。またレバノン南部サイダ市近郊のパレスチナ難民キャンプ周辺でも同様の銃撃戦が行われた。米国、サウジアラビア、シリアなどがそれぞれの思惑でイスラム過激派を支援しているという噂もあった。

一年ほどが経って、元の明るさを取り戻した彼女と再会した。会わなかった一年のあいだに起こったことを互いに報告しあった。

「父が亡くなったの」

と彼女はさびしそうな笑顔で言った。お父さんが亡くなる前に会いに行けたのだろうか。悲しみを蘇らせるようで質問はできなかった。お父さんが糖尿病だということは以前から聞いていた。それに弟が勤めている銀行を辞めるかもしれないこと、アメリカ人と結婚していた妹が離婚して一人娘を連れてレバノンに戻ったことなど、遠く離れた家族のことを彼女はいつも気にかけていた。離れているからこそ切なさが増したのだろう。そして彼女の家族が住んでいる場所はサイダ。あの銃撃戦があったパレスチナ難民キャンプ近くの町である。

イスラエルという火薬庫の隣の小国はなんてやるせないのだろう。そこに生きるふつうの人びとはなんて哀しいのだろうかと思う。国のあちこちに廃墟となった町が放置され、難民キャンプはそうした廃墟になった町の中にできあがるのだと聞いた。登場しては消えていく数え切れないほどのイスラム過激派は難民キャンプを根拠にしている。いっどこで銃撃戦が起こっても不思議ではないし、ときにはイスラム勢力とイスラエルとの戦争になりふつうの人びとの上にも砲弾が飛んでくるのだ。彼女の実家が実際に被害を受けたとは聞いていない。お父さんが亡くなったのも重い糖尿病のせいだ。でも彼女の心に「崩落感」を強めたのは、故国があの内戦のときのように混乱と破壊の中に消え去ってしまうのではないかという耐えがたい不安だったのではないだろうか。

パレスチナの周辺では血なまぐさい事件は日常のことだ。日本では放送されないような残酷なニュース映像をここでは日常的に見る。人びとは慣れっこになっているのだと私は思っていた。でもそれはまったく間違った認識だった。なんとも鈍感で想像力のない心だった。

そしてあるときあるささやかなできごとが私に教えてくれたのは、大事なことを知らんぷりしてはいけない、ってことだった。

それはパレスチナのガザで激しい攻撃が続いていた一月六日のことだった。たまたま「ジェナデリヤー」という催しに参加しようとしていた朝のことだ。ジェナデリヤーというのはサウジの人びとがかつてベドウィンとして生きた歴史や伝統を忘れないために行われる民族的行事のひとつである。その日はコミュニティ内の女子セカンダリースクール（中学校）で催しが行われることになり、私たち外国人居住者（女性のみ）を生徒の母親たちとともに招待してくれることになったのだ。

待ち合わせ場所にやってきた車に乗り込むとイギリス人女性サリーさんがそこにすでに乗っていた。彼女のご主人はコミュニティ内の病院でスーパーバイザーという立場で働いているイギリス人である。私たちはそのイギリス人女性の車に乗せてもらうことになった。

八人乗りのSUV車の最前列にサリーさん、エジプト人内科医のハナ先生そして運転手が座った。私は他の日本人女性たちとともに真ん中の座席に、最後部座席にも日本人が座った。車が走り出し、サリーさんがハナ先生にまず話しかけたのは大規模な戦闘が続くガザ紛争のことだった。サリーさんは顔を曇らせながらハナ先生に太く低い声でお悔やみでも言っているようだった。そしてバックミラーの下にパレスチナ国旗の半旗を掲げていることをアピールした。ハナ先生はその心遣いに対し、目をうるませながら静かに謝意を伝えていた。

二〇〇八年末から二〇〇九年一月にかけて、イスラエル軍はパレスチナのガザ地区に大規模な空爆を行った。「ガザ紛争」と呼ばれる三週間にわたる武力紛争である。ガザ地区に住む多くの住民が死傷し、また多くが家を失なった。アラブ人たちはまたしても悔しさを心に沈めただろう。連日続く大きなニュースだったにもかかわらず、私はあいかかわらず無頓着でいた。アラブ人の友人たちに言葉をかけることなど思いもよらなかったのだ。

だから二人のやりとりを見ていた私は感嘆した。サリーさんがどういう考え方の持ち主であるのかは知らないが、アラブ人たちの心情に配慮するその行為はさすがだった。この国では政治や宗教に関わる問題に触れてはいけないと思っていたが、そんな意思表示のしかたもあるのだと知った。悲しいことがあれば励まし、うれしいことがあれば喜びを分かち合う。世界中のどこにでもあるありふれた営みじゃないか。さらに私はそのときまでパレスチナの国旗を知らなかった（正確には国旗といえないかもしれない）。

アラブの人びとは重大なニュースには明快に反応する。9・11同時多発テロのとき、サウジでは携帯電話で「おめでとう」のメールが飛び交ったという噂がまことしやかに囁かれている。また四日前、オバマ大統領が就任したその日、私のところにもメールが送られてきた。「マブルーク（おめでとう）・ブラック・プレジデント」。多くのアラブ人たちはアフリカにルーツを持つ米大統領の誕生に希望を抱き、喜びあったのだ。実際、その希望はほんの数日間だけで消え去ってしまったけれど。

私が出会うアラブ人女性たちはイラクやパレスチナで起きていることに強い興味と関心を持っているし、政治に対する希望や反発も豊かに表現してくれる。でも彼女たちのそうした気持ちを知れば今度は私がやるせない気分になる。

「イスラム同胞」という言葉があるが、現実のアラブ諸国同士は友好的でない。ほとんど近親憎悪とも言える宗派対立や国境紛争などで反目し合っている。サウジアラビアは隣国イラクを同胞として支援するどころかむしろアメリカの同盟国である。イスラム同胞が機能するのはせいぜいが反イスラエルという立場だけではないだろうか。

穏健派であり親米派（9・11以降変わったと言われているが）のサウジアラビアもイスラム同胞のリーダーとして当然ながら反イスラエルの立場ではある。サウジ国内で手に入れる地図にはイスラエルという国名は書かれていないし、イスラエルに入国したスタンプが押されたパスポ

ートを持っている人はサウジに入国できない。

しかしアラブ各国のリーダーたちは、あまりにも強硬なイスラエルが正邪をわかりやすく示してくれるのをほくそ笑んでいるようにさえ見える。イスラエルがイスラム同胞という幻想をまき散らす装置となっているからである。



2009.1.24

【引用コラム】

「サウジアラビアとアメリカ (上) / 2002年11月19日

サウジアラビアの砂漠の中に「エメラルド・シティ」という町がある。イラク国境から南へ150キロ、クウェート市から南西に300キロほど離れた、北緯27度57分、東経45度33分にある。

この町の名前は、町の中心にあるモスクの屋根が緑色で、宝石のエメラルドのような色をしていることからつけられたとされている。だが、このロマンチックな名前は町の正式名称ではなく、愛称にすぎない。正式名称は「ハリド国王軍事都市」(King Khalid Military City)という。「軍事都市」という名前から想像されるように、ふつうの町ではなく、65000人の要員を擁することができる巨大な軍事基地である。(ハリド国王は、1982年に亡くなったサウジアラビアの4代目の国王)

しかも、エメラルド・シティという愛称にも裏がある。この町の名前はもともと、アメリカで書かれた物語「オズの魔法使い」に出てくる。日本語訳では「エメラルドの都」となっているこの町には、魔法使いが住んでおり、主人公のドロシーが、なかなか見つからないエメラルド・シティを探して歩く旅が、オズの魔法使いのストーリーとなっている。サウジアラビア政府は、自国内に米軍基地があることを国民に知られたくないため、ハリド国王軍事都市の存在を秘密にし続けた。そうしたサウジ政府の態度を皮肉って、探してもなかなか見つからない秘密の町だという意味を込めて「エメラルド・シティ」と米軍関係者が呼ぶようになったという。[以下略] (田中宇「田中宇の国際ニュース解説」『田中宇の国際ニュース解説ホームページ』)

きょうは愛すべきラクダ（駱駝）について、ああなんと、その悲惨な運命についてお話ししなければなりません。サウジといえば、砂漠。砂漠といえば、駱駝。駱駝という文字からしてエキゾチックなのに、顔はごらんのとおりグロテスク。「かわいい」という見解と「いやらしい」という見解とに分かれるところですが、あなたはどちらでしょうか。私はもちろん「かわいい」派です（笑）。



なんといってもその「目」。人間もふくめてほとんどの動物は上まぶたを上げ下げして目を開閉するのに、ラクダくんは下まぶたを動かして目を開閉している。そのように見える。なので、静かに諦念を噛みしめているようでもあり、人間を見くだしている不遜なまなざしのようでもあり、はたまた、ただ眠たいだけのようでもある。

私たちが日常よく利用する、ゆったり片側二車線の高速道路には、しばしばラクダが闖入してくる。遊牧の民ベドウィンが道路周辺でラクダを放牧することがよくあるからだ。この道路、車の数は少ないが、時速一〇〇キロぐらいの走行がふつう。ラクダの交通事故がよくあるらしい。背高二メートルほどのラクダと車が衝突すれば、車も人も損害を被るが、ラクダのほうはたいてい助からないだろう。かわいそうなラクダくん。

「できるだけ遠くからヘッドライトをフラッシュさせてラクダに警告せよ」といった内容の注意事項がポスターとなって病院などに貼られている。

道路を横断するラクダくんを車内から見ているところ。



さて場所は変わって、スーパーの肉売り場。人びとは魚よりも肉が好きとみえて肉売り場は充実の品揃えである。「鶏肉」「牛肉」「羊肉」が主流でずらり並んでいるが、「ハト」「うさぎ」なんてのもめずらしくない。あるとき、ちょっと見た目が「豚肉」に似ている肉を発見。

「hashi」と書いてある。肉売り場のお兄さんに聞くと「ラクダ」だと教えてくれた。

のちにサウジ人にたずねてみた。

「ラクダを食べるのか」

すると「yes!」や「of course!」が返ってきた。「あなたのお名まえは？」とたずねたときに返してくるような平然としたまなざしである。他のアラブ人にたずねても同様の反応だった。

「へえ、そうなんだあ...」とちょっと戸惑いを感じる私。

だって、何日も水も飲まず、人間の水を運び、ときにキャメル・ミルクさえ分けてくれる、砂漠を共に旅する仲間であるラクダを食べるなんて！

「そうだよ、特に巡礼月には、神にささげるいけにえのためにたくさんのラクダが殺されるんだ」

「へえ そうなんだ！」



肉屋の店先に吊らされたラクダの頭

いけにえになるということは、人間もその肉を食べていいということなんだ。あたりまえに存在しているラクダ肉食文化、私たち日本人はほとんど知らないのだが。

というわけでラクダくんには悪いけど私も（ちゃっかり）さっそく味見に挑戦した。見た目同様、味も豚肉に近い気がした。豚肉がご法度のこの国で豚肉代りに料理に使えるそうだと期待したのだが、夫からのクレームでその案はすぐに却下されてしまった。

「僕はラクダなんてぜったいに食べないよ。そんなゲテモノ、食べるなんて信じられない、なんてヤバンなんだ」

と、さまざまな蔑みの言葉が飛んできた。そう言われたら私には返す言葉は何もない。

「アラビア語では日本のことをヤーバーンって言うのよ。まっ、関係ないけどさ」

2009.2.23

3 1 消えた旅行計画

二〇〇八年になるとご近所に住んでいたさまざまな国籍の夫人たちが続々と帰っていった。プラントもほぼ完成に近づき、建設に携わった人びとが任務を終えてすこしずつ帰国するようになったからだ。

プラントと言ってもそれがどのような施設なのか私はまだ見たことはないが、いつのころからかコミュニティから二、三〇キロ離れた地点の砂漠のはるか向こうに工場の建物群が見えるようになり、また夜には巨大な煙突が噴き出す燃えさかる炎が通り過ぎる車からもよく見えるようになった。その炎は三六五日二四時間消えることがないという。

インドネシア人のミアさんも昨年一〇月にラービグを去って行ったひとりだ。ミアさんのご主人は日本人である。彼女は会話はできるが、日本語の読み書きができない。あるとき彼女が読み書きを勉強したいというので私は彼女の日本語の先生になり、友だちになった。彼女のご主人は日本へは帰らず引き続きサウジで仕事をする事になり、アルコバールに引っ越して行った。アルコバールは私が最初に住んでいた町だ。そして彼女は私が住んでいた同じコンパウンドに住むことになった。「なつかしい」と言ったら、「じゃあ、ぜひとも遊びにおいで」ということになった。

日本人のMさんとメキシコ人のJさんと私の女性三人で三週間後の週末（水木金）にかけて行こうという話が煮詰まってきた。二日間はアルコバールに滞在し、三日目はアルコールが飲めるバーレーンに行こうという旅行計画を考えた。

しかしここはサウジアラビアである。女性だけでは旅をするどころか移動することも簡単ではない。最低でも男性が一人付き添わないといけないということになって、Jさんのご主人（スペイン人）が途中から参加してバーレーンにいっしょに行き、ラービグまでいっしょに戻って来るということになった。では行きはどうか。「女性三人だけでタクシーでジッダ空港に行き、飛行機に乗り、ダンマン空港からタクシーでミアさんの住むコンパウンドに向かう」。

しかしこの計画にはクレームがついてしまった。女性だけのグループでタクシーに乗ったり、飛行機に乗ったりすることは控えてほしいと。夫たちは仕事を休んでまで妻たちのお遊びに付き合ってはられない。そりゃそうだ。どこのだれがクレームをつけたというようなことではない。私たちが旅に必要な手続きをひとつずつ踏んで行く過程で暗黙の「ノー」が押し寄せてきた。諦めるしかなかった。

つい一週間ほど前にもマダイン・サーレというサウジで名高い観光地への女性だけの旅行の話が耳に入ってきた。一度はマダイン・サーレに行っておきたいと思っただけだったが、夫の本帰国がままない私としては再び苦勞の多い旅支度に費やす時間も気力もなかったので断わった。結局その旅行計画も具体化しなかったそうだ。

治安がよいと言われているが、この国では外国人は必要以上に慎重に行動しなければならない。テロが起こる危険性もある。二〇〇六年二月に東部州アブカイクの石油施設では自動車爆弾テロ未遂事件が起こっている。二〇〇七年二月にはマッカ州でフランス人の団体が観光旅行中過激派に襲われ四人が死亡する事件が起こっているが、犯人はいまだ不明である。

交通事故の発生率も高い。ハイウェイで止まっている事故車を通りすぎりによく目撃する。交通マナー教育が行き届いてないせいで、スピードの出しすぎによる衝突事故や交差点での接触事故が多いらしい。運転中に携帯電話でしゃべっている運転手の多さには呆れる。タクシーやバスの運転手でさえハンドルを片手で握りながら延々としゃべっている。ただしこの国には飲酒運転はない（はずである。あつたら死刑かもしれない）。

もしも交通事故に巻き込まれてしまった場合とてもやっかいらしい。まず警察官はほとんど英語がしゃべれないし、事故の相手がサウジ人だったらこちらに非がない場合でもこちらが不利な立場になるというから怖い。交通事故のためになぜか逮捕されることもあるという。どうなるかは現場の警察官の胸ひとつということだ。だからよほどサウジ歴が長いアラビア語が堪能などの場合を除いて日本人男性は自分で車を運転して遠出したりはしないのだ。

性犯罪の発生も少なくないらしい。犯人はもしかしたら単身で来ている出稼ぎ労働者が多いんじゃないかと思う。この国は男性が遊ぶところがないし、商店に買物に行っても店員は男性だし、レストランに食事に行ってもウェイターしかいない。生活のあらゆる場面で男女が隔離されているから、彼らが女性に飢えてしまうのは生理の必然である。そして女性に飢えているのは結婚できないサウジ人男性も同じだ。

領事館から「ひったくりに注意」という情報があったちょうどその時期に被害にあった女性がいる。同じコミュニティに住むイタリア人女性がジッダの大型スーパーでひったくりにあったのだ。カートを押し、子どもを座らせる位置にハンドバッグを置いて、ご主人とならんで買物をしていたときにバッグを盗まれた。バッグの中にはあらゆる貴重品が入っていたと彼女は言う。財布、クレジットカード、パスポートまでも。その日私もその同じスーパーで買物をし、彼女と入れ違いに帰ったのだ。彼女でなく私が被害に遭っていたかもしれない。

町なかではムタワ（宗教警察）にイチャモンを付けられないように注意することも大切だ。ムタワが何に文句を付け、何に噛み付いてくるかも一通りではないらしい。

たとえばゼットイにアバヤを着ないといけないのかということそうでもない。身体の線が表に出ないゆったりした長衣はアバヤに代わるものと見なされるという。現にジッダ空港では、色とりどりの民族衣装の巡礼団の女性たちが闊歩しているのだ。ジーパン姿で飛行機から降りてくる女性もいれば、スーツ姿にハイヒールで一人搭乗口に立つ女性を見かけたこともある。

欧米人たちは私たち日本人に比べたら自由気ままだ。湾岸戦争後にサウジ国内に駐留を始めた米軍の女性兵士たちはジープを運転し、タンクトップとショートパンツ姿で町を歩いたと言われている。そうした光景はサウジの人びとに大きな衝撃をもたらし、反米感情と風紀取締りが強まっていく転換点となったといわれている。

女性の水着姿が禁止されているサウジでわざわざ禁を破って水着姿になれるのも欧米人である。

彼らはサウジですら、ときに欧米流をつらぬく。ルール違反をしなくても自分たちの流儀を守ろうとする傾向は強い。彼らの人目を引く行動様式はけっきょく優越意識のなせるわざではなかろうか。欧米人は強い反感も買うが尊敬もされる。ひたすら目立たないように行動することを旨とする日本人は反感も買わないかわりに尊敬されることもない。

【引用コラム】

「5. 宗教警察（勸善懲悪委員会）について

（1）当国には、イスラムの教義に反する行為を取り締まるため、「勸善懲悪委員会」という政府機関があり、いわゆる「宗教警察」通称「ムタワ」と呼ばれ、外国人に対しても日常生活の中で関わり合いを持っています。例えば、礼拝の時間になると「サラ（礼拝）」と大声で叫びながら人々をモスクに駆り立てたり、公の場で髪の毛や手足を露出している女性がいれば厳しく注意をします。また、場合によっては、理由もわからないまま連行、身柄を拘束されることもあるようです。私たち日本人や欧米の常識から見れば理不尽だと思われるかもしれませんが、その土地の風俗習慣を尊重し、理解と敬意をもって対応することは海外生活の基本であるということを前提として、サウジ社会への理解を深めて頂くことが、この問題を回避するための一番の近道と言えますが、基本的には、その場から速やかに立ち去り、無用の紛議をさけるように努めることが大切です。特にラマダンの月には一段と取締りが厳しくなるので注意が必要です」

（在サウジアラビア王国日本国大使館「防犯の手引き」 『外務省海外安全ホームページ』）

32 さらばジッダ

三月一九日木曜日、ジッダに買物に出かけた。最後のジッダ行きだ。何度となく訪れたこの街ともいよいよお別れなのだと思うとやはりさびしい。じつはひと月ほど前に本帰国が決まったのだ。みやげ物や記念の品をあれこれ買ったかったので気合いを入れて早起きしてみたのだが、着いたときは九時すぎで街はまだ眠っているようだった。

ベドウィンのラグ（小さな絨毯）、それもできればアンティーク物を私は欲しかった。その日のメイン・イベントはそれだった。サウジのアンティーク品の写真集に掲載されているベドウィンたちの持ち物は一九六〇年代から七〇年代に欧米人たちが叩き売りの安値で持ち去っている。少数ながらベドウィンは今でもいるが、彼らは伝統的な自然素材の手織りラグなどを遠の昔に手放して耐久性の高いアクリル製の工場製品を使っている。今さら私が欲しがったところで手遅れだ。せいぜい博物館や写真集でながめることしかできないのだ。しかしそれでもくもしかしてゝという気持ちが私を突き動かし、オールド・ラグを求めてジッダの街を歩き回った。いや車で走り回ったのだ。ジッダという町をよく知っているアリーが縦横無尽に車を走らせてくれた。

アンティークショップ街にも行った。小さな店が一列にならんだ一画があり、ひとつずつ店をのぞいてみた。そこで食器・アクセサリー・衣装に紛れてなんと古いベドウィン・ラグを数枚見つけたのだがそれらは私が想像していたものとは違っていた。それほど古いものでもなかった。やたらに重くゴワゴワしていて手織りの繊細さや温かみを感じられなかった。とうぜん値段は安い。五分間くらいは迷ったが「へんな臭いがするからやめたら」という夫の一言（いつもナイスな一言で私を救ってくれる）で退却した。ちょうどお祈りの時間で私たちが店を出ると店主は電気を消しシャッターをガラガラ下ろし始めた。



アンティークショップ街

ジッダに買物に行くときにいつも運転手となって街を案内してくれたアリーの家族がその日はめずらしく合流することになった。

買物が一段落した午後、中心街から小一時間、車を飛ばしてある新築のマンションの前にとどり着いた。建物の中に入っていくとまだ乾ききらないコンクリートの匂いがした。部屋の扉が開くとそこは広々とした品の良い調度が置かれた空間だった。さしずめ玄関の間といったところだ。アリーが私だけを誘って廊下の奥に向かった。キッチンとは別に三部屋ほどがならんでいる。どの部屋も一五畳かそれ以上の広さである。廊下のつきあたりの部屋に入るとそこは家族の居間であるらしく大きな薄型テレビが置かれ、壁面には座椅子のようなソファがL字型にずらりとならんでいた。

アリーの奥さんのサミーラとサミーラのお母さんが床に足を投げ出して座っていた。二人とも手足の出た涼しげな服装で顔も髪も隠していない。ポットに入ったアラビックコーヒーを供されて最初のうちは話が弾んだが、やがて話題が尽きて、私を除いた三人だけがアラビア語で会話し始めた。いつまでも話は終わらない。私は少し苛立ちを感じ始めていた。〈この人たちは私をもてなしてくれてるのだが、私の夫は玄関の間に置き去りにされている〉。抜け出して夫を見に行くところ、ゴージャスなソファの上で寝息を立てて寝ている。どっちもどっちだと思いながら居間に

戻り、まだ続いているアラビア語会話の輪の中に座った。この部屋には換気扇の穴のような小窓が一つだけ付いている。開け放たれたその窓から湿った生ぬるい風が吹き込んできて私のはやる気持ちを急ぎ立てた。ジッダ最後の買物はまだ終わっていなかったから私は早く出発したかった。

そこはサミーラの実家で、私たちは彼女と娘のリナを迎えにきたはずだったが、かれこれ二時間ほどが経っていた。出かける間際になって五歳のリナがメイドとともに現れた。大人のいる場所に子どもは入って来られないらしい。

サミーラとリナを加えて車はまたジッダの中心部へと戻って行った。おみやげ用のデザートとチョコレートをかうために何か所ものお店をハシゴして気づいたときはとっぴりと日が暮れていた。

みなで夕食を食べることになった。アリーと夫と私との三人で食事に行ったことは数え切れないほどある。しかしサミーラがいっしょなのは初めてだ。送別会のつもりで付き合ってくれたのだろう。しかし驚くべき夕食の光景を見ることになるのだ。

週末の夜のレストランはどこも大混雑である。三〇分くらい待たされて私たち五人はやっと席についた。私たちは〈女連れ〉グループだから個室風のボックス席に入った。入口にはカーテンが引かれる。お酒はないから「サウジ・シャンパン」と呼ばれるフルーツポンチ風ジュースで乾杯。ガラス製の冷水ポットにアップルジュース、炭酸、カットオレンジ、りんご、レモンの薄切りなどが入っていて美味しいけれど、やはりお酒のない夕食は物足りない。

テーブルに料理の皿がならび始めるとサミーラは黙って一人食べ始めた。いい忘れたが、彼女の実家を出るときからずっと顔をブルクー（ブルカ）という黒いベールで隠したままだ。顔を覆うブルクーからは目だけ出ている。食事が始まると彼女は器用に布の下端を顔から離しては食べ物を口に運ぶ動作を繰り返した。決して顔を出さないのだった。

それはなぜかという私の夫がそこに同席していたからだ。彼女がブルクーを外すだろうと期待していた私はがっかりした。夫はわざと彼女のほうを見ないように気をつけている。彼女はとても美しいサウジ女性だ。よその男に自分の美貌を見せてはいけないというのはわかるが、こんなときぐらい顔を見せたっていいのに。日本人の男なぞしょせん異教徒ではないか。遠いかけ離れた存在だ。なのにそこまでするとは驚いた。

夫のアリーが恐ろしく嫉妬深いからなのだろうか。いやいや彼らが話しているところを見るとサミーラのほうが相当パワフルであるからしてアリーは間違いなく尻に敷かれている。夫の威厳の賜物ではない。ではなぜ彼女はそんなにもかたくななんだろうか。アリーのお母さんもお姉さんもみなキャンプのときに顔を出して接してくれた。なのにサミーラだけは顔を出さない。サミーラは婚家（アリーの生まれた家）のやり方ではなく自身が生まれ育った家庭のやり方を貫いているのにちがいない。それがサミーラの神への約束事なのかもしれない。

さてジッダの町で見かけるレストランについて少しコメントしておきたい。ファストフードの店もアメリカンスタイルのレストランもいっぱいあるが、やはりなんといってもアラビアンのお店が多い。

まずサウジ料理。サウジの伝統料理というとカブサだけ。サウジ料理のような顔をして登場してくるさまざまなメニューのほとんどは近隣諸国料理だ。だからサウジ料理店とはカブサ料理店だと私は考える。そしてサウジ料理店はよくも悪くもワイルドな雰囲気にも包まれている。あるサウジ料理店では、すべてが安アパートのような個室になっていて、部屋の中には安物の絨毯が敷かれ、肘枕がたくさんおいてあるが、テーブルはない。大きな包装紙のようなものを広げて、運ばれてきたカブサ、ソース、サラダ、ホブズ（アラビヤパン）、ペプシコーラなどを置き、車座になって手づかみで食べるのだ。ここはフォークも箸も出てこないから。もっとワイルドに決めたい場合は屋外の日よけの下に座って食べることも可能だ。ちなみにその店はトイレが一つしかなく、女性客を見かけたことがない。

そもそもサウジ料理店という言い方があるのかもどうかも不明。レバノン料理店、シリア料理店

と謳った店のほうが多い。

夜の街にはレストランの窓辺から煌々と明かりが洩れて楽しそうに食事をする人びとの姿が食欲を誘うものだが、サウジではそういう席に座っているのは男性ばかりだ。女性がひとりでも含まれるグループは「家族席」に座らされる。家族席はたいてい二階か奥まった場所にあり、専用の入口がある。入ってみると間口の広さからは想像できないくらいに奥深く広い。ファミレスのボックス席に仕切り壁を付けたような席がずらーっとならび、扉やカーテンで完全に仕切ることができるようになっている。隔離席の意味は家族と食事にやってきた女性が顔を出して家族と水入らずの食事を楽しむためである。閉まったままのカーテンから料理の皿を持った手だけが現れたりする。

簡単な仕切りしか置かないレストランもめずらしくはない。ある大きなシーフードレストランに入ってしまったとき、おおぜいの東アジア系の男女が食事をしていて。テーブルにはまったく仕切りがなかったが、二階には個室も用意されていた。アラビア料理店の中でもエジプト料理店は雰囲気少し違っている。家族席があるのは同じだが、仕切りは衝立があるだけだ。またおじさんがひとりで経営してるような小さな店では家族席がそもそもない。スタバなどのカフェの場合も大まかに男性エリアと家族エリアが分かれている。家族エリアの内部では男女みな顔を合わせてコーヒーを飲んでいる。そんなわけで人びとは自分の流儀にあった店を選んで外食やコーヒータイムを楽しむのである。

その日、食事のあともまだまだ買物は夜遅くまで続いた。アラブの音楽のCDが欲しいと言うと、車はジッダの下町らしき古びた商店がならぶ通りの前で止まった。アリーと私だけが店に入った。CDジャケットとカセットテープのケースが壁一面にならんでいる。左右に置かれた腰の高さのショーケースの中にも商品が置いてある。カセットテープが半分以上を占めている。日本ではカセットテープで音楽を再生する人は少なくなったが、海外ではカセットテープはまだ廃れていない。CDプレーヤーに比べてラジカセだけの再生機は値段が安いからだ。

私はとにかく店の中を何度も見回した。何となく〈ヘン〉だ。ショーケースの向こう側にいる二人の店員はいたってにこやか。でもやはり何かが〈ヘン〉なのは変わらない。私は用意してきたアラブ人歌手の名前を挙げてみた。店員はにこやかにいくつかのCDを取り出して見せてくれた。言い忘れたけど、彼らは英語は話せないのでアリーが通訳。で、見せてくれるCDのジャケットはすでに封が切られ、いかにも使用済みの様相。

「新品はないの？」

「ないよ」

？」

中古CD屋さんに連れて来られたんだ。アリーという人は裕福なサウジ人なのに、大きなショッピングモールをあまり利用しない。いつも連れて行ってくれるのは下町のゴチャゴチャした品揃えのお店だ。食料品を買いにスーパーに行こうというときも「いいスーパーがあるから」と連れて行ってくれるのはこじんまりしたスーパーだったりする。小さなスーパーでは日本人の私が買いたい品目は見当たらないのだ。

とにかくそのときも彼は精一杯安い買物ができる店に連れて来てくれたわけだ。「新品のCDを売ってるお店」と指定しなかった私がいけなかったのだと言えないこともないが、しかしまさか中古CD屋があるとは思わなかった。中古CD屋に連れて行かれるとも思わなかった。そしてあとでわかるのだが、その店はじつは中古CD屋でもなかったのだ。

店員はとても親切で言われなくても試聴させてくれる。最終的に私はCD二枚を選んで買うことにした。

「じゃあ、ちょっと待って」

「いまコピーしてるからさ」

一五分くらい待ってコピーはできあがった。店員がCDにアラビア語で歌手の名を書いてくれて一枚約一五〇円。ケースも袋もくれず書き込んだCDを裸のまま手渡してくれた。そこはれっきとした海賊版レコード店なのだった。



ジッダという街はいつも驚くことにあふれている。海賊版はCDにかぎらない。あらゆるものの違法コピー商品やら勝手にブランドマークをくっつけた商品が正々堂々と店にならんでいる。ジッダはヴィトン、グッチなどの高級ブランドがとても安いという評判だ。正規販売店があるにもかかわらずだ。ラマダンやハッジなどの時期に行われるバーゲンは、いかなるカラクリがあるのか極端に安いといわれる。

最近アラビア半島の南方ソマリア沖では海賊が出没してそのあたりを航行する船がよく被害に遭うらしい。アラビア半島周辺、陸でも海でも海賊が横行している。

記念に買ったサウジらしいものももうひとつある。世界中どこにいてもアザーン（お祈りの時間を知らせる呼びかけ）が聞けるラジオ。うれしくて翌日からすぐにセットしてみたらさっそく苦情が来た。家の中にはもう一人しかいないからその人からの苦情。

「どうしてそんなに朝早くから鳴るようにしたの」

しかたないもん。時間が来ると自動的に叫ぶようにセットしたんだし、最初のお祈りは日の

出前って決まってるんだから。

2009.3.21

晴れわたった空の下、モスクの尖塔に設置された拡声器から朗々とした男性の声があたりに響きわたる。お祈りの時間を知らせるアザーンである。独特の哀調を帯びたそれは心にしみわたる。異国にいるのだということがしみじみと心に刻まれる。厳粛な気持ちになりながらも、昔、日本の街角でよく聞いた物売りの声や響きを私はいつもアザーンに重ねて思い出すのだ。玄米パン売り、竿竹売り、金魚売り。東京の下町育ちの私ならではの音の記憶。



アザーンが聞こえてくると街には人びとがあふれ出してくる。人びとは三々五々モスクへと向かい、整然とモスクの中に吸い込まれていく。歩いてくる者もいれば、自転車や車で乗りつける者もいる。しかしモスクへ向かう人びとの群れに女性はいない。みな男性ばかりである。

アザーンはいつも「アッラーフ・アクバル」という言葉で始まる。アラーは偉大である、という意味だ。そして「アラーのほかには神はなし、ムハンマドはアラーの使徒である、礼拝に来たれ」といった決まり文句が格調高く詠唱される。ところで夜明け前のアザーンにだけ「礼拝は眠りよりも尊い」といった一句が加わる。早朝四時前後にまだ眠っている人びとを起こすためのひどく現実的な一句に苦笑してしまう。昔は夜明け前のお祈りを告げることを職業としていた人がいたそうだ。まだ眠っている家々の窓に向かって「礼拝は眠りよりもよいー」などと叫びながら狭い路地を巡ったのだろう。

ムスリム（イスラム教徒）のお祈りといえば、おおぜいの人びとが同じ方角を向いて跪き、頭を床に付けてお尻を高く上げているあの光景。おおぜいの中に女性の姿を見ることはほとんどない。サウジでは女性はモスクに出かけて礼拝をしない。たいていは自宅でお祈りをする。

たまたまお祈りの時間のときムスリム（正しくは女性はムスリマという）の家にいっしょにいたら「お祈りするからちょっと待ってて」と言われたことがある。彼女は白いお祈りポンチョ（なまえ不明）を服の上から着込んで何やらを唱え、次にお祈りラグの上で跪いた。私は彼女が祈る姿を横で見てもいいのかわからないようにしたほうがいいのか迷ってしまった。彼女は立ち上がりまた跪き、そういう動作を繰り返した。私としては土下座をしている人を横で見ている心境なのだ。見てはいけないものを見ているようでひどくばつが悪い。でもどんなふうにも礼拝を行う

のかを見ておきたい気持ちもあって、結局じっくり観察してしまったのだが。彼女は見られることに少しも抵抗を感じないらしかった。幼い頃から祈り続けてきたのだから恥ずかしがることもないのだ。

話は変わるが、アラブ人の女性はダンスがうまい。腰の動かし方がダイナミックだ。女性だけの集まりに行くと円座の真ん中に出て踊る人がいる。小さな子どもたちもアラブ風の音楽に合わせて大人顔負けの濃厚な腰振りダンスを披露してくれることがある。彼女たちは幼い頃からアラブのダンス（ベリーダンスではない）を見よう見まねで覚えるのだろう。お祈りの動作もダンスと同様、ごく自然に身につけるものなのだろう。

彼女たち（あるいは彼ら）はまた物心つく前からクルアーンの短い章句やお祈りの決まり文句を覚えさせられる。それもまた頭で覚えるというよりもお祈りの中で繰返し唱え、身体で覚えるのだ。神はアラビア語を介して人間に啓示を行ったとされており、アラビア語こそ選ばれし言語というわけで、すべてのムスリムはクルアーンの何章かをアラビア語で覚えなくてはならない。だからインドネシア人もバングラデシュ人もムスリムはみなお祈りのアラビア語を知っているのだ。

ムスリムたちはなぜお祈りや断食をサボったりしないのだろうか。彼らは修行に励む聖職者のようにいつも神とともに生きている。それは彼らが来世に天国に行きたいと願うからである。「ほんとうに？」とあなたは笑うかもしれないが、それはほんとうなのだ。

「死んでからの生命は永遠、現世の生命はほんのかりそめ。死んで火炎地獄に行くことになってもいいの？」

と問われたら、だれだってイヤに決まってる。そういう質問を何度も受けるとやがて、〈私も天国への切符を念のために確保はしておきたい〉と思うようになる。

ムスリムにはなれないけれど、正しく生きていれば天国にきっと行けると思う。アラー（神）が唯一の絶対的な存在であるならば人間が現世でイスラム教徒であろうがキリスト教徒であろうがはたまた仏教徒であろうが、そんなことで人間を差別するとは思えない。身勝手な論理かしらね。とにかく「インシャッラー」。世界のすべては神の御心のままである。

さてとつぜんですが、四月一〇日、主人と私は日本に帰ることになりました。

二度とサウジにもどることがないと思うと人びととの別れはとても切なく悲しいです。引越し荷物を送り、人びととの別れを惜しみ、記念の品々を交換し、名残りは尽きませんが、一方で日本に帰れることはたいへんうれしく、心の中で「やった！」と叫んでいます。

2009.4.9

あとがき

二〇一〇年暮れに起こったチュニジアのジャスミン革命、二〇一一年、エジプト一月二五日革命では、ともに長期独裁政権が退陣を余儀なくされました。その後も若者を中心とした民主化の波はアラブ各国に飛び火し、今なおアラブ諸国を変動の渦の中に巻き込んでいます。アラブの盟主と言われた大国エジプトは、最初のデモ行進からわずか三週間足らずで政権が崩壊してしまいました。約半年間、内戦の様相を呈したりビアでも八月下旬にとうとうカダフィ政権が破れました。

サウジアラビアは、これまでのところ政権を揺るがすほどの大きなうねりが起こっていないようです。しかし「アラブの春」に応えたいらしい次のような二つのニュースが伝わってきています。

。九月二五日、サウジ・アブドゥラー国王は地方議会における女性の参政権（選挙権と被選挙権）を認める方向を示しました。

また九月二九日、国王は、車の運転を強行してジッダの裁判所からむち打ちの刑を言い渡されていたサウジ人女性に対してその刑の実施を免除しました。

だからといって、すぐに女性たちに参政権や運転が認められたわけではありません。

国王といえば、絶対権力者と思われませんが、サウジアラビアにはもう一つの権力があるのです。それは宗教勢力と言われるものです。国王といえどもシャリーア（イスラム法）に則って国を治めることが求められます。シャリーアを解釈・研究するイスラム法学者たちを頂点とする宗教勢力が今なお大きな力を持っているのです。

政権の安泰のためにももっと国を民主化したいと国王が望んでもそう簡単に変革できないのには、そうした事情が影響しているからだといわれています。

女性の参政権や女性の車の運転の権利なども近い将来かならず獲得できると私は信じています。サウジアラビアが欧米型の民主主義をそのまま取り入れるとは思えませんが、すべてはなるべくしてなっていくでしょう。これからの若い世代がその答えを握っているのだと思います。

私はサウジの女性たちの勇気を応援しています。

また最後まで読んでくださったみなさまに心から感謝いたします。

2011年10月3日

サウジアラビア便り 第二部

<http://p.booklog.jp/book/35277>

著者：夏目椰子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bismil1019/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35277>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35277>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.